和漢朗詠圖字抄

一

高蘭山先生述

和漢朗詠集國字抄

朗詠の抄書多くとゝどゝ其間多く義足らずして釋文煩なれば續ぎ今諸家の說と折衷し謬を糾訂し句々の字を國字と點じて其句々の義を訓釋す和語は惟だ抄し鼇頭に本文を來假名にして讀むいろはとをさゝ童も速に讀みて而を忽ち講釋まさしと弁ふべし

和漢朗詠集抄序

傷情詠詠集者四條亜槐公俊卿所緝也詩歌寸二致和漢風情一蓋本邦和歌以二句爲一首也故詩不採入唐文ふ撫首尾而亦二句一聯以偶和奇句中衒奇言分有閑故二の詠吉也而公卿暨縉

紳若至皂隷無不貯硯匿矣世書行千世
殆八百年事其間始有江家註中有賢明之
註玄慧之抄后有永濟李吟之註陶不之解
釈而麗有雜迎意密有他意意賞兒女
之情槩出也今也書肆書堂新企梓行強
需我々豈有必說乎唯冀古人之粹去糟
就麗細之妙抄義於是乎兒童可謠婦女の歌
此実為識者也總閭巷之詞勿誘其野云
享和第十二龍集癸亥立春日
高井伴寛述

和漢朗詠品題

○第一　春　詩文　九十七章　和歌　四十六首

立春　早春　春興　春夜　子日　付若菜

三月三日　付桃　暮春　三月盡　閏三月

鶯　霞　雨　梅　付紅梅　柳

花　付落花　躑躅　款冬　藤

○第二　夏　詩文　三十五章　和歌　二十三首

更衣　首夏　夏夜　端午　納涼　晩夏

花橘　蓮　郭公　螢　蟬　扇

○第三　秋　詩文九十四章　和歌四十五首

立秋　早秋　七夕　秋興　秋晩　秋夜

八月十五夜付月　九月九日付菊　九月盡

女郎花　萩

紅葉付落葉　雁付歸雁　虫　鹿　露

蘭　槿　前栽

霧　擣衣

○第四　冬　詩文三十二章　和歌十四首

初冬　冬夜　歲暮　爐火　霜　雪

氷付春氷　霰　佛名

○第五　雜　詩文七十六章　和歌二十首首

風　雲　晴　曉　松　竹

草　鶴　猿　管絃付舞妓

文詞付遺文　酒

○第六　雜　詩文九十四章　和歌二十八首

山付山水　水付漁父　禁中　古京　故宮付故宅

仙家付道士隱倫　山家　田家　隣家　山寺

佛事　僧

○第七　雜　詩文六十九章　和歌十七首

閑居　眺望　餞別　行旅　庚申

帝王 付法皇　親王 付王孫　丞相 付執政

將軍　刺史　詠史

○第八　雜　詩文 八十七章　和歌 二十三首

王昭君　妓女　遊女　老人　交友

懷舊　述懷　慶賀　祝　戀　無常

白

通計 詩文 五百八十四章　和歌 二百十六首　朗詠八詩文全章のうち

もゝ二句を採一聯として和歌の上句下句に擬する偶七言絶句四句なり出るごとくもこれ八二章とす文も是に倣ひ一章を別五絶八全く一章なるあり

○日本作者　和漢の作者傳の疑ひ多し暫くこれを欠て黑く次他日古書の正説を得て鑛合さるべきなり

醍醐天皇　六十代延喜の帝なり　村上天皇　延喜帝の皇子天曆の帝と朱雀帝に嗣ぐ六十一代

惟高親王　文德帝の皇子にして清和帝の御兄なり　前中書王　村上帝の御子二品中務卿中務卿の唐名又御子左宮と号

菅丞相　菅原是善の三男右大臣道眞の公贈太相国北野天神と崇む　後中書王　貞平親王　寛弘六年薨

清慎公　小野宮關白實賴公の諡なり　紀納言　彈正忠貞範の男中納言紀長谷雄卿字八紀寛公の父

江納言　大江中納言維時文章博士　後江相公　從四位下大江王淵の男參議朝綱　天德元年薨

野相公　敏達帝の後裔參議岑守の男小野姓參議篁　善相公　參議宰相三善姓清行相公と云八又て參議宰相

橘相公　參議廣相　菅三品　右大辨高視の男式部太輔三位文時卿　天元四年薨

菅雅規　右大辨高視の男山城守菅丞相の孫にして菅三品の兄　大江匡衡　參議左大辨齊光の男匡房の曾祖父

源英明　寛平法皇の御孫齊世親王の御子　左近衛中將前藏人頭客の女

源相規　肥前守　圓融帝御時の人

源爲憲　筑前守忠幹の男　寛弘八年卒

統理平　三統姓　從四位式部大輔　延長四年卒

良春道　良峯姓　延喜の時の人

菅輔昭　菅三品文時卿の男　大内記

藤篤茂　藤原繁茂の男　大内記

橘在列　尊敬　延暦寺の主呂　俗名橘の在列

都在中　良香の男

江以言　大隅守大工仲宗の男　式部大輔文章博士

菅淳茂　菅公の四男　秀才

橘直幹　尾張守秋成の孫長門守長盛の男　康保のれの人

源順　至の孫左馬允舉の男　後撰集和名集の作者　和漢の才人

紀淑望　紀中納言長谷雄卿の男　古今序の作者

都良香　主計頭貞継の男　延喜の朝文章博士

橘正道　少納言匡利の男　宮内少丞　高麗小渡り宰相と云

慶保胤　慶滋姓　江孫加茂忠行の男　法名智覚　圓融帝御時の人

小野美材　岑守の孫篁の男　掃部頭　延喜の時の人

田達音　又忠臣と云　本朝文粹の作者

義孝　謙徳公の男　少將　行成卿の父なり

藤惟成　左中弁惟孝の男世に五位の摂政と号す　拾遺の作者

江澄明

菅庶幾　右大辨高視の男　大學助

高相如　高陞姓出雲國司朗詠の作者　公任卿の師なり

資忠　菅原雅規の男　一条院御時の人

物部安興　圓融院御時の人

采女　美濃國十市の女　此集に菅家紀納言等の名を記すに初は略後に略氏又は紀納言と記し次は略紀と記又初の如く記誤に似り

藤爲雅　周防守

藤伊周　中關白道隆公の男大納言　後廢禁左遷召返され儀同三司

紀在昌　紀長谷雄卿の孫村上帝御時の人

紀齊名　本姓田口後紀氏に改む　大内記兼越前守

橘侯草

平佐幹　本康親王の孫行忠王の男　從五位下二河守

清滋藤　清原姓右少辨　圓融院御時の人

○漢作者

李斯　楚の上蔡の人秦に説て客卿となる

左大仲　名思齊國の人少にして博覽なり

陸士衡　吳人名ハ機牙門將軍となる陸侍郎陸將軍とあるも同じ

公乘億　字ハ壽山唐の代宋文集一卷連昌宮の賦愁の賦あり

白居易　字ハ樂天事に坐して江州の司馬に遷る自ら醉吟先生と号す

温庭筠　唐の並州の人字ハ飛卿書千餘言を誦り方山の尉となる

元稹　唐の河南の人字ハ微之白氏の詩友元九と云是く

杜荀鶴　杜牧子ハ微子字ハ彦之九華山人と号す翰林學士

劉禹錫　唐の世の人字ハ夢得漢の景帝の後なり

李嘉祐　唐の大原の人字ハ摩詰官尚書に至る詩画高名なり

許渾　唐の丹陽の人字ハ仲晦睦郢二州の刺史

王維　唐の祁縣の人字ハ巨山嘉祐が姪にして大曆十才子の一人

李嶠　字ハ孝常皇甫冉が舅侍御史監察後評州司馬

皇甫曾　唐の汾州の人字ハ延清

皇甫冉　唐の汾州の人字ハ茂政十歲小文を作官左補闕に至る

宋子問

賈嶋　唐の范陽の人字ハ浪仙初ハ浮屠を信ず韓退之教て文を爲

章孝標　唐の桐廬の人大理評事に官す

張文成　名ハ鷟唐の深州の人青錢學士と称す祕書監に至て誣憲

張讀　讀ハ續の誤〻呉縣の人宋の明帝の時中書令因子奈酒

楊衡　字ハ中師唐の右子傅に出す

鄭師冉

劉元叔　名ハ敬叔一ふ字ハ平叔高密縣のべ

郢展

謝觀

謝偃　唐の貞觀中述聖の賦を作り時の人謝賦と称す

羅胤　唐人羅鄴羅隱と号して三羅と号す一本に胤を維に作る

賀蘭遲　字ハ進明唐の至德中嶺南の經畧使員外郎に終る

智者太師　天台山に住し摩訶止觀筆

前ふる云とく初白居易と記しふ白と畧記せハ終まて白と有べき故然らざるハ謂るべし

和歌作者

二徳天皇　應神帝の皇子人王十七代

小松天皇　仁明帝の皇子五十八代光孝天皇之小松の陵に葬り奉る

村上天皇　詩の作者に出

志貴皇子　天智の御子施基皇子を云ふ　御子光仁帝位まゐ田原天皇と謚

明日香皇子　兼和元年甍久賀姓の祖

七条后宮　宇多帝の后宮温子

一条攝政　九条右丞相師輔公の男伊尹公　謙徳公と謚す

清慎公　詩の作者に出

朝綱　詩の作者に出　後江相公

人丸　柿本氏持統文武の朝に仕る石見播磨等の守　歌道の仙人丸大明神　正一位

仲満　安倍姓父祖不詳元正帝宝亀二年入唐　中書紀守の男と非

花山院　冷泉帝の皇子六十五代の帝　早く世を厭ひ山に入法華修行の覧

安貴王　天武帝の御孫大津皇子の御子

原見王　高市皇子五世の孫従五位上　摂津の守　奉緒の父

九条左相府

齋宮　重明親王の御女伊勢の齋宮の女御徽子　後村上帝の女御の立事

鹿景殿女御　村上帝御時の女御　代明親王の御女

赤人　山部氏正六位上宿禰養老神亀の比の人　人丸同等の哥仙

望　詩の作者に出る野相公

大納言重光　代明親王の一男

家持　大納言大伴宿禰族人の男　従三位中納言

安倍廣庭　左臣御主の男權中納言　養老の比の人　晴明が先人

藤原高光　九条右大臣師輔公の八男　五位左少將法名如覺

兼輔　勸修寺家の祖良門の孫左中將利基の子　中納言

忠岑　李允忠衡の男　壬生姓　今古今撰者四人の内

平兼盛　光孝帝の御末大貳篤行の男王氏なれども天暦の比平氏

宗于　光孝帝の御孫是忠親王の二男　正四位右京大夫

業平　平城の御孫阿保親王の五男　行平の弟在原中將美濃權守

紀貫之　望行の男　従五位上佐守　李頭　御書所の預　内宿禰称の末

重之　清和帝四代の貞元親王の御孫兼信の男　東宮帶刀

元方　業平の孫棟梁の男歌道賞美かうて古今集巻頭

藤原經臣　大學頭佐高の男　肥前守

千里　大工音人の男　正五位下伊豫權頭

友則　宮内少輔紀有朋の男　一説に非　古今撰者四人の内　大内説

賴基　伊勢祭主輔親の男　神祇大輔祭主　能宣の父

藤原興風　濱成の曾孫永谷の孫　道成の男從五位下相模守

公忠　大藏卿国房の男四位右大辨　滋野井弁と号す

深養父　清原姓豊前房則の男　内匠大允藏人所の雜式

實方　左大臣師尹卿の孫大納言濟時卿の男　陸奥守

躬恒　凡河内姓行氏の孫諸躬の男　凡の字今ハ甲斐少目

正澄　近院右大臣能有公の男

忠見　忠岑の男摂津国大目

坂上是則　父祖詳ならず　大内記延喜の比の儒官なり

良材　詩の作者に出　筆の男

惟正　中納言兼輔卿の男　從五位下　丹部卿

清正　中納言兼輔卿の男藤原左少辨五位　天德二年卒

敏行　按察使富士丸の男右兵衛督　四位少將

好忠　先祖詳ならず　曾祢氏丹後掾　曾丹と称す

元輔　清原深養父の孫下野守顯忠の男　肥後守後撰集撰者の内

能宣　大中臣祭主輔親が孫頼基の男　後撰集撰者五人の内

道信中將　太政大臣藤爲家　恒德公の四男　從四位上左中將

義孝少將　詩の作者に出

橘直幹　詩の作者に出　好風の男

良峯宗貞　良峯安世の男左近衛少將　遁世して遍昭僧正是也　末に再出

平貞文　好風の男

源順　詩の作者に出

爲賴　中納言兼輔の孫雅正の男　宮大夫大進　拾遺の作者

高向草春　作者部類に官位等詳ならずとあり

元眞　甲斐守春宗清雅の男丹後少　後拾遺の作者

伊勢　伊勢守藤原継蔭の女　七条の后の宮女

信明　式部卿敦實親王の御女

中務

仲算　南都興福寺の僧　拾遺の作者　元亨釈書に出

齋宮内侍　伊勢の齋宮の女御に仕る　内侍へ誰が女なるや知らず

繩丸　詳ならず　人丸の書誤なるべしといへり

白女　源造が女　江口の遊女

丹後國人　誰とさして云るや詳ならず

海人　江口川尻などの遊女の類なり　水辺に住しもの云々

王仁　漢の高祖八代の孫百濟国より來て難波津の宮に仕へ

達磨大師　南天竺香至王の子梁魏に入　西に行く康宗圓覚大師を贈

傳教大師　東漢の景帝の餘衣商三津氏　百枝の男名最澄山宗の祖

空也上人　仁明帝の御孫常康親王の御子六波羅密寺に居す　天祿三寂す

恵慶法師　播州の産寛和の比の人　父祖詳ならず

遍昭　俗名良岑宗貞の弟子良僧正とも出家し茲覚の弟子寛平三綜　素性法師　遍昭俗名時の子俗名左近将監良岑玄利

蟬丸　逢坂山の関門延喜の御子と云説非　満誓法師　筑紫観音寺の別當俗名笠朝臣麻呂従四位上

玄賓　和州三輪の山に隠遁の僧弘仁五年律師に任ぜらるを辞す　安法法師　内匠頭の適子拾遺の作者

○所縁詠賦

詩　詩序　和歌序　書序　表　讃　願　史文　策序

書　本書文　文選文　漢書文　後漢書文　文集文

止観文　遊仙崛文　和歌　自萬葉集至後撰集代代之集及家々之集

本朝の詩文ハ菅家文草本朝文粋等より抜出し漢家の詩文ハ唱和集白氏文集の類より採来る及び和漢諸家の集を拾ひ取て題すれども此集ハ全章法すゝ取ざるも略きゝ題かくして句の解るさとり閑題の意ハ記す和歌ハ万葉々後撰の比の至を取此集の作者公任卿後の撰集の名目を記ハ後に家集より撰ぶ

和漢朗詠集

捨假字附讀ゝ　仮字を加て読む　助字ハ□を印と　讀ざるゝ一字ハ再反讀ハ○を印と　次詩多くハ訓ふよみ來る今改るゝ世本の點ふ差を怪ゝ

和漢朗詠集抄卷之一

東武　高井伴寛思明著

和ハ日本ゝ　神武天皇大和国に於て王業を成しゝふ故やまと又ハ和をゝて日本の惣称と次殊庭に倭を以て名ゝ○漢ハ震旦ゝ　元來水の名　吾邦より彼国の古今を通じ唐漢に王をして国ハ漢と号す　或ハ唐と云其治の盛なるに取るゝ○朗ハ清明透徹ゝ○詠ハ詩歌の詠吟ゝ以上をゝて本朝唐土詩哥の秀逸と云んが如し　和国ハ思を歌ふ述漢土ハ詩を以て志を云詩哥に秀吟ゝ人皆是ハ誦ゝ又朗詠と云○和哥ハ素戔烏命出雲国にて初て三十一文字ハ詠ゝ詩ゝ尚書に五子之歌ハ毛詩ハ周の列国の古詩ゝ漢の李陵字ハ少卿初五言の詩ハ作り日本ゝ　天武帝の御子大津皇子初て詩賦を作り来世々博士出て秀歌佳作文庫に満ゝ中の朗詠詠吟ゝ　ゝ集て此書成り○四條大納言公任卿と云ハ三條關白頼忠公廉義公の嫡子にて頗博雅の名ゝ御堂關白の二男大二條關白教通公いまゝ大將にて　ゝ時堪に取るに硯の筥に入ゝ　彼公任卿の撰ゝ　一條帝ゝ御時ハ當ゝバ寛政の今迄ハ百年に及り

春

立春

吹を逐潛に開芳菲之候を待不春を迎乍に變ず。將に雨露之恩を希と

春

立春

逐吹潛開。不待芳菲之候。迎春乍變。

紀淑望

將希雨露之恩。

まづ冬〳〵立春の氣として吹を逐て潛に梅花綻びて桃櫻芳菲の候をも待ず冬〳〵枯の樹々を春城迎ヒバ乍に変じ色付雨露の恩を希て開んと欲○延喜の帝の勅として梅花をして此賦を献る賤が身のうゝ命を蒙る八冬〳〵樹の春にあひ寒木花初て綻ぶ如くなる君の恵を待て〳〵雨露の恩に希ふ心ざしを述べうさまで此句也てぞ〳〵四位の加階ぜーとぞ

凡て詩釈假字點ずて直に字義を覺知多ゝしバ果て此字を斯訓と思ひ

池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。

春の氣、東方より成ぬ同じ池の凍ゐまづ東の頭よりまづ温る風度解ぬ春八來ぬ

池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。

柳氣力無して條先動。池に浪の文有て氷盡開

今日知不誰か計會せー。春風春水一時に來

夜殘更に向として寒磬盡春香火生て曉爐燃

柳氣力無して條先動。池に有浪文氷盡開

白居易

年とともに春八來ぬり一とせを去身とやいそんさとやいそんえん方

朗詠の撰者、公任卿八紀貫之を宗とせーぶて古今集のごゝ年のうちの立春ぬ卷の頭よりぬれり

今日不知誰計會春風春水一時來

上よ通じて一首の絶句ぬ今日立春として春風柳を動ー春水池に浪ら誰人か計會てかゝ一時に春ぬ來らーしるや知ぬと昨に変る景色を云

夜向殘更寒磬盡。春生香火曉爐燃

良峯春道

年竜に江及石山寺に詣て作まる除夜も殘更に向ーわどて佛前の磬ぬ寒き音も盡曉の燒香まる香爐の火ぬ燃て温るゝ今や春生思

神ぬもてむぎ氷のゆまる氣ぬ立りぬ風やとくらん

貫之

基のたろハ被も浸るまも擬さり水の久く氷るを春ろ風か吹解さるへいちてふ〜てくもまぶるにすくふちう

拾遺

春〜ろといそぐうまみよ山もを踏てと胡ふんもん　忠岑

早春

氷消田地蘆錐短。春入枝條柳眼低　元稹

きのふにくる春景色山る多るに芳野の山ハ

ある八春を用ゐる儀ようり

早春

氷消て田地ふ蘆の芽の出さる八錐の短く物ようさ出さるとく春の氣ふ柳の枝條ふ入て芽を吹さる八眼のとく志ろも枝垂さるさ面を低と作ゑり

先遣和風報消息續教啼鳥說來由　白居易

春の來を客ふ喻ふう和ゆる風の吹來ハ先へ消息ハ知くり報んと報

越ふ似くうやぐて啼鳥の轉ハ客ふ來て來由を說話もるやうにある

東岸西岸之柳遲速不同南枝北枝

東岸西岸之柳遲

先遣和風報消息續教啼鳥說來由

春の來を客ふ喻ふう和ゆる風の吹來ハ先へ消息ハ知くり報んと報

越ふ似くうやぐて啼鳥の轉ハ客ふ來て來由を說話もるやうにある

東岸西岸之柳遲速不同南枝北枝

速同〜不。南枝北枝之梅開落已小異

紫塵の嬾蕨人手伸拳。碧玉の寒蘆錐囊を脫す

氣霽て八風新柳の髮を流氷消て八浪舊苔の髭洗

庭に氣色を增八晴砂綠なり林ふ容輝を變ぜ八宿雪

之梅。開落已異

彼所ハ此處と地を逐て春の生來るを作ゑ文〜春の氣東方〜ろ〜する面〜東の岸ふる柳八速くめぐ〜西遲南八暖ふる面〜梅の南の枝とく開とく落北寒遲

慶保胤

紫塵嬾蕨人拳手碧玉寒蘆錐脫囊

多く蘢出さる早蕨の色紫の塵の如くなるまぐ嬾く弱く曲〜る八人の手を拳るさ面〜春まぐ寒く沈蘆の芽ふ尖生て青々と碧の玉の如く水中ふりさ出さる八錐の囊を脫て尖出るに似ゑり○史記ふ賢士の世に處る八錐の囊中に在如〜といり

里相公

氣霽風流新柳髮。氷消浪洗舊苔鬚

天氣霽て春風の新柳をかびるも髮流ふ似ゑり氷消て岸打浪舊年〜よりの苔にてくく鬚を洗〜と此下の句羅城門の思ふ付るく妄說いり

都良香

庭增氣色晴砂綠林變容輝宿雪紅

庭ふ春の氣色を增せバ晴砂ふ草ふ芽ぶ綠くなる林の樹々ふ花咲容輝冬ふ景色に引變ぜバ宿雪も紅の色を帶と上ふ草下に樹を云

紀納言長谷雄

紅なり

春興

万葉

岩ばしぐなるひのくれなゐ歳のとく出る雲ふ咲これるこの木

志賀雪子

氷の上に氷のうゝるを垂氷と云ゝ谷氷のたゝうゝ
冬ゝ氷居るその上ゝ早蕨萌ゝる春まも成るとゝ

山風ゝとくる氷のむまどにうもいけるゝ波やまの初花

正清

山中ゝそ春の風に氷の解ゝ流る氷の岩ゝどにわゝうて散ゝ波の花と云なゝ
早春ゝて樹々の花も咲絲ゝ是ゝ春の初花ゝ〳〵ん心ゝ今ゝ谷風ふゝとゝ赤花ゝ

続後撰

ゝん波ゝ花ゝ咲ゝ根ふ雪消ゝて春つゝ芽ゝ出ゝ

藤原

暁遥ゝり比良岳の山ゝ早春の景色を打眺ん高根の雪も
消ゝく野辺の若菜つゝ遊ぶ色ゝ長閑なるゝ春ゝ

ゝんわゝせゝ柳揺ゝ花ゝ

素性

此哥下の眺望の処ふ出早春の歌ゝ絲ゝ詠ゝ
入ゝるゝゝ〳〵末ゝ釈す

春興

花の下に忘れ難ゝ景色の美ゝ家ふ帰ゝ
樽ゝ前ゝ酒ゝ暫ゝ春の風徐ふ吹ゝ盃ゝ
酔ゝ勧ゝ

白

作者白居易

花の下に帰ゝ忘ゝ景に因樽の前
ふ酔ゝ勧ゝ是春の風

野草芳菲ゝ紅錦
の地遊絲繚亂ゝ
碧維の天

歌酒ゝ家家花ゝ處
處空上陽の春ゝ管
頭ゝ今ゝ莫ゝ

山桃復野桃日紅錦
之幅ゝ曝門柳復岸

花下忘帰因美景樽前勧酔是春風

野草芳菲紅錦地遊絲繚亂碧維天

春の野の草芳菲ゝる地に紅錦をのゝ敷ゝ春の麗ゝる天は
碧の羅を張ゝ遊絲繚亂ゝる春の虚に有ゝ無ゝ絲ゝ

劉禹錫

歌酒家家花處處莫空管領上陽春

白

なゝ酒ゝ家ゝ花ゝ咲ゝ春の盛ゝ
歌ふいとゝとゝ

令孤尚書ゝ東都ゝ越ゝ送ゝる詩ゝ春ゝ歌ゝ酒ゝ翫ゝ家家ふ
ゝり花も處處ふ咲ゝどに行先其地ゝ春ゝ花ゝ賞ゝ詩ゝも作ゝ我ゝ
一巳ふ管領春ゝ思ゝ押領ふ空ゝ過ゝ風雅ゝ春ゝ莫ゝ春夏ゝ陽ゝ次
上陽ゝ春ゝ云ゝ秋ゝ冬ゝ陰ゝ

山桃復野桃日曝紅錦之幅門柳復

柳風麴塵之絲を統

野に著て展敷り紅錦繡天に當て遊織す碧羅綾

林中の花錦は時に開落す。天外の遊絲は或は有無

笙歌の夜の月家家の思詩酒の春の風處處の情

岸柳。風統麴塵之絲

紀齊名

山にも野にも挑ぐ咲く日にうろひ紅錦の幅をのべ曝すごとく門にも岸にも柳の芽ぐ吹くるぐ風ふけばき黄なる絲を統るやうにみなびて麴の塵は黄なる色(黄なること)に此字をつかふ統ぬ共訓む處を逐て花皆好と云を作る詩の序にうつて山野門岸などの字に用さう

著野展敷紅錦繡。當天遊織碧羅綾

野に著は諸の草花咲交りて紅錦の繡せ一ぱいて展敷さるごとく天に遊絲をまとひて碧の羅綾を織成るごと ○前の野草芳非と云は唐も笙の此句を襲

野相公

林中花錦時開落。天外遊絲或有無

林の中に錦を咲ぐ花も時に逐て開落をわ散まあり天外に遊絲は或は有わるひ無さうちうぐ遊絲前に釈に

田達音

笙歌夜月家家。思詩酒春風處處情

月清き夜笙歌歌舞して家々に遊ぶ人の思ひ春の風に詩を作酒に酔ひ處々に興ある情を思ひ樂悦ぶ者多と悦者衆の顯作

菅三品

新古今

ちぐさのおもはぬかぜのふきぬれば花ぞ春をしるべ

赤人

三月は節會公事に朝廷いとまなく四月に神事いそ三月花の比は閑暇もあるは花の下にくつろ櫻を簪てさのふもりよも花ぞなげ矢暮すく百敷と内裏に百官の座敷儀と云加大宮人は殿上人と云は非なるとも

拾遺

春は我まとりぬむざうんばば春さ人らわ一れ

太宰

花盛の比はいづくの山もいづくの野の末までもとわくられ心ものどかの絲ぞ我此心を推てちをひやもぞ失る誰々も斯わん長閑なる花の春心のどかの興

春夜

背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春

春の夜盧仝周諒と云人と同居して作る也共ふとり同とあるえ燭がぢやなるる也炎を壁の方向大小背て夜深るまで月をなぐめ共に憐る

白

庭に散る花を踏て春の暮るを同じ心に惜む

少年は〻づ〻若輩といへる詞へ

春夜

燭を背て共に憐深夜の月。花を踏て同惜少年の春

雲の夜八つ過ぎわや梅は遅ふて入（ヨ）雪やふくるる　紀貫之

咲くる花の色ハかくもとゝもるどう梅ゝ薫をかるゝ得んをゝゝバ春の闇ハんもりゝとくあやゝゝハ無詮無益かど云心なり

子日　付若菜

正月子日に登て遠く四方を望て陰陽の靜氣を得まバ煩ひ除く通ゝて正月七日用るゝ又歳首に祝ゝて松が枝を手折男八七本女八二七十四本又七日若菜を羹ふゝて食ゝ病ひ十節記初學記等ふ見ゝり

倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期氣味之克調　菅作者是菅原相

寛平八年宇多天皇雲林院に子日行幸の序に松ハ貞樹ふて風や霜ふも犯さず常盤の色を見ず是ふふ腰を摩ゝて貞ふ習ふ正月七日若菜の羹ふ調和而啜ふ人の氣味を調へ克ゝて病ひ〻〻ゝを期ける

倚松根而摩腰千年之翠滿手折梅

手に滿梅花を折而頭に挿ハ二月之雪衣に落

松根に倚而腰を摩ハ千年之翠

花而挿頭二月之雪落衣　在列尊敬

松が根に倚ゝ腰を摩枝を折ふ人ハ曳持ゝ千年祝詞の翠手のゝちにある子の日に遊のさゝ梅が枝を折て頭ふゝ挿ハ花の散るゝ二月の雪衣袖に落る

新古今

子の日ゝゝて志めにする時ハ四の姿小松ひろゝやゝの陰ゝゝ　清正

子の日の遊びふ此野ハ我がそのとゝ製ゝるゝ小松の生ゝるゝ曳も引ゝ其ゝ千年の陰をまちゝんゝ紀伊守ゝ任国の時子の日ゝ

拾遺

子の日する野辺ハ小松ゝ雲のゝりせばゝゝの陰にゝ引ゝ　左岑

野辺に小松ゝ人ゝ壽の長ゝんゝ松の千ゝせふ

拾遺

ゝゝとせ引ゝゝかゝ引る松ゝりふゝゝハ君ふひろゝて百代や陰ん　紫宸殿

八道式部卿親王子の日ゝふ歳ゝてゝる松千ゝせと限ゝども今君の御齡ゝゝば万年ゝゝ夫ふひゝ松も万代を引んゝ

若菜

野中ニ芹菜。世事推ニ之蕙心。爐下ニ和羹。

俗人属ニ之黄指ニ　菅

野に出て若菜を芹つゝ羹のごとにする世事ハ蕙心ニ推ち蕙心ハ文選の字そ美女こゝろハ女のこゝろ爐下ハ竈のもとゝ和もるハ烹調る俗人ハよのつねの人黄指ハ黄のごゝ紫なる女の指ゝ詩にて手ハ紫黄の如

拾遺
わかなつゝハ芹菜にまぜん片岡のあられ雪のふるやくめる　人丸

草木を肥ゝ生ゝめんとて春の野を焼ふやく野辺ニ程なく能とる菜生ゝぞんとの心すて明日のとの片岡朝之原ゝ大和の名處なり

新古今
のもゝハつのれつまんとは思ふきのふまりよる雪ハ消つゝ　恋人

志ゝ野ハ前ゝも出ゝ〻ゝ〻ト領ゝる意ゝ〻〻〻
毎日つまんと思ひゝに雪にとらまゝるなり

新古今
わかゝ〻〻こんぬ人ゝ思ゝ〻〻春の野にゝるみにつめるゝ芹なりけり　実之

野に出て若菜つゝ遊びゝ奥の淺ゝぬを家ゝ在て入ぬ人もゝ〻ひ忍べとのゝぬに篭ゝつゝてゝ入するゝ篭ゝハゝごのゝなり

三月三日　付桃

昔周公旦洛邑城トゝて都城築ゝ時流水ゝゝて觴上の巳日を用ゝ魏ゝより三日ゝ用る

春來遍是桃花水。不辨仙源何處尋。

桃花源と云仙境を顯せゝ春來て三月の比ハ何ゝの處ゝゝ桃花の水ゝり何を證ゝて仙源を尋んとゝ漢の世ゝ武陵の漁人舟ゝて江を上る水ゝゝゝ桃の花咲乱て人の通ひゝ路ゝり舟を繫て尋行ゝ家もなく男女住ゝのゝり故を問ハ秦の乱を避てかくゝてゝハ十餘年食せざるゝ十三年とゝ桃源の隱士と名付ゝり　王維

春之暮月。月之三朝。天醉干花。桃李盛也。我后一日之澤。萬機之餘。曲水朝天。花小干醉。桃李盛ゝゝゝゝゝゝゝ也。

我后一日之澤萬機之餘。曲水遥なると雖。遺塵絶くると雖。巴の字を書而地勢を知。魏文を思て以風流を翫。蓋志之所謹て小序を上

雖遥遺塵雖絶書巴字而知地勢思魏文以翫風流蓋志之所謹上小序

菅

春の暮月八三月の三の朝八三日く此時節咲つく花が映て天る紅醉ると見るハ桃や李の盛なるハ也書に天子一日万機と有ごとくに臨のふ其餘を以て我后今日宴を臣下にのふハ恩沢ハ〻ど后の恵のふと水を以てるとけるを沢ハ〻ど此儀を沢と云曲水周ると始る也遥と云後代る古の跡を遺を遺塵と云此宴久く行もざる也絶くると云江州に三の山峡ありて三面もる水ある流曲水と云形にして巴郡と号ル巴の字を古文に書む◎〻くのごとく曲水の地の形勢知らる魏の文帝姓八曹名八丕字八子植曹操の子へ文帝の時曲水の飲なり巴日を用ひず三日を用ひ今其先跡を思て風流を翫ぶハ周の世遥なりといへども遺風絶くるといへども昔を目前に見るごと志の之所に住せ謹て小序を上るへ詩の序へ毛詩の序に詩者志之所之といへり蓋八物を摘て云とい

つふ詠なり

煙霞の遠近戸同戸桃李の浅深ハ勧盃

なる應。桃李の浅深ハ勧盃に似くり

石に礙て遅來也ハ心竊に待。流に牽て端過也ハ手先遮

煙霞遠近應同戸桃李浅深似勧盃

前の序と同時の詩へ酒を飲て上中下戸なり煙霞る春の景色遠ク空も近き虚るもむしろく花に醉る也同ごとの戸まてある桃李の紅の色浅きも深きもとく〻酒盃を勧て天を醉むるに似くり

礙石遅來心竊待牽流端過手先遮

羽觴流を面る曲水の宴を作るを鸚鵡の盃を羽觴と云流繁る水岸に文士並居て水上まり觴を流し我前を過ぬ前に詩を作り盃を掬て飲貴賤を論ず文才を重する盃が石に礙らも流來るとも遅りれば詩篇巧なる心竊とく來也ハと待流に牽立らまて端き前を過ぬ詩いまだ吟ド

菅雅規

おくれハ先手を以て盃を遮るとむる

菅篤茂

水成巴字初三日源起周年後幾霜

三月初の三日曲水巴字を成の酒宴その源周の世の古き年周公旦洛邑に觴を浮ふ起て後今まで幾ばくの星霜を経るらん巴字八前に釈

桃

夜雨偷ふ濕て曾波之眼新に嬌る。曉風緩吹て不言之脣先咲

桃　仲春花咲三月その色さうん

夜雨偷濕曾波之眼新嬌曉風緩吹。不言之脣先咲　紀納言

桃始て咲と云詩の序に夜の雨ふ濕さを花の偷ふをとぐるハ美人の眼の媚るに似たり曾波ハ美女の眼ぬぐふ細き皺ありて曾波ふ似たりと云

今咲る意を新に嬌と書る曉ぐ雨も止春の風緩ふ吹て不言の蕾咲るを云

不言を受て脣とつゝ眼の字に對せ史記ふ桃李言ざれども下ものゝ蹊を成と

拾遺

こゝかとせになるてふ桃のかとゝうゑ咲春にあふぞうれしき　紀恒

西王母が園の桃三千年に花さき實と云故事漢の武帝桃の實を好ふ春實のなれを愁ふ時に一足の青き鳥武帝の前に飛來東方朔いとく王母來るとて屏風の後にかくるゝやうて王母花と實の一時ふむもべる桃を携來てゝ王母云下土の物ふあらぬ上界の果に三千年ふ一度實まつ味甚美く帝植んとを王母云下土の物ふあらぬ上界の果に三千年ふ一度實三度盜食るのゝと、ゝ

暮春

水を拂柳花千萬點樓を隔る鸎舌八兩三聲

暮春

翅を低る沙鷗八潮の落曉絲を亂る野馬八草の深春

人更ふ少時無須惜。年常に春なら酒を空くすべ莫

劉白若今日の好

拂水柳花千萬點。隔樓鸎舌兩三聲

元稹志に云人の襄歸樓を過て作る三月の比柳の枝ぶり垂て水面を拂ふ其絮ふ飛て千萬點浮ぶ柳花八絮ふ樓を隔て聞鸎舌ふ春深兩三聲ふ

低翅沙鷗潮落曉。亂絲野馬草深春

菅公仁和年中讃岐守にて任国ふ下り松山の旅亭ふて作ふ曉潮の落る比鷗が翅を低て沙ふ下遊居る春の空ふ遊絲亂まこゝる比草長ゝて深〜遊糸前ふ釈ふ又莊子に其急なるとゝ野馬の走るゝさうしるゝ野馬とも云或陽焰とも云野馬むまを云ふ絲と字の縁よて草深春の言

人無更少時須惜。年不常春酒莫空

老て更ふかて少き時ふあはとる日日の過行を惜むべき春ふ前ふて年中常ふ春ふあゝべ春の景色を愛酒と贈ふ空くすべ

小野篁

劉白若知今日好應言此處不言何

る我知らず此處とハ
言應何とハ言不

三月盡

春を留めども春
駐不。春歸て人
寂寞ら。風ぞ厭
ども風定不。風起
て花蕭索ら

竹院君閑ま て

深春好と云題ゆて作りし劉禹錫と白居易と何處ら春深好ぞ源順
云句を首ふ記五言二十首の詩を作唱和集ふある此二人若今日深春の
詩席好ちる我知らず此處をら春深く好と言ぶ
何との処ぞとハ云ぶ しくに此席を好といくく
古今
いづくにか春は暮るらむ我が宿の花の木ごとに雪ぞ降りける 紀貫之
家の集に此歌あり古今ハ月日ハ何とも知ず花見る春ハすくなく雪に物やるとく
月日ハ何とも知ず花見る春ハすくなく雪に物やるとく

三月盡

留春春不駐。春歸人寂寞。厭風風不
定。風起花蕭索

白

春駐まらぬ暮歸て出て遊ぶ人をなく寂寞なり 風起て花の散る
あし景色もうせて蕭索なり此詩ハ古詩の調に落花を作ぞ

竹院君閑銷永日。花亭我醉送殘春

永日我銷。花亭
ふ我醉て殘春我
送

惆悵も春歸て留れ
ども得不と我紫藤
花の下に漸黃昏ら

春我送に舟車我
動とを用不。唯殘
鸞と落花與に別
若韶光を使我意
我知使ば。今宵ら
旅宿ハ詩の家ふ在

皇甫氏竹を愛せり此人白氏の亭に客ふ來り詩を贈る其返
酬の作なり君ハ竹を植ふる院ふ永き日我銷閑に暮さら我ハ花の咲
ふる亭に酒ふ醉るぐ殘春を
ちーみてたのしーま

惆悵春歸留不得。紫藤花下漸黃昏

白

春歸去我留ても得ざれを惆悵藤ハ暮春より夏ふ至る花の外に
花もるれば紫の色を愛しーなくして漸黃昏ふちぶ

送春不用動舟車唯別殘鸞與落花

菅丞相

人を送る舟や車をも用る春我送ハ殘鸞老て谷ふ入
花落て青葉とかえるが春の別や車ハ車馬車乘とてのりやの次同詩

若使韶光知我意今宵旅宿在詩家

前ふ通ぶ絶句一章ハ韶光ハ春の名なり若韶光が此方ふ
意を知るぶば今宵一夜ハ此詩の家に旅宿人めぞと此詩春を送る題ぞ

留春不用關城固花落隨風鳥入雲

固を用不花落て
風に隨鳥雲に入

閏三月

曹操ハ関羽を留んとて五関城固め秦皇ハ胡人を留んと
長城を築すて人を留る關や城の固で防ぐ春ハ中々留ぐ花ハ風に隨
て落鳥ハ雲に入て跡を
とめず歸去り
古今
ふのゝと春ハ思ぬ時ぶもたつてやまれも法ハ
紀貫之

上の句と下の句の間にてをのもハ早く聞も今日限て春の終と思ぬ時
花ハ慕心のとなるもとど今日のもと思ふ花の陰ハ妹に立やすく思ハる
拾遺
花をこれちりぬる宿ハ白く成れるとゝ成ぬべらなれ
貫之

花も散春の去る跡さびしくて人の住捨荒る古郷の如くなる意
行春の惜るさゝよ咲り成ぬ屋ゝとハなりぬべさと云ふ同
後撰
又もあん時ぞと思へどたのまぬ我身なれ〜あまとなりぬ
貫之

今日暮る春ハ又來年も來るべれど存命ぞうぐくたのまぬ世なるもハ
むとしは春のくはゞちりたとえ貫之三月晦日ふ此歌をよみ同年卒り

閏三月

閏を置て堯典に出られ古たとえ周天の三百六
十五日二十五刻を二歳に二十四氣ふ分て十五日二
十一刻余を二氣とし内十五日去て殘を氣盈とし又月ハ一年
の日數大小を積合セ三百五十四日三十七刻余一ケ月二十九日五十
三刻余ゑて月朔とする一ケ月の定數三十日に足ざると四十六
刻余殘朔虛とす氣の盈と朔の虛と一ケ年の過不及分合
て十日八十八刻を一年の閏余とし三年積て閏置閏余分殘
る四五年ふ再閏を置十九年に七閏わて過不足ふ閏とす
ざれバ四時齊ざるあ和漢ことを用るゝこゝに云ハ閏ゞ三月に
當まるゝ又閏の字周禮ふハ閏と漢書ふハ閏と皆說あり

今年閏在春三月剩見金陵一月花

李中丞ゞ軍ふ行を送る詩軍務ふ在ゞゞも閏ふて春ゞ
一月多〳〵剩金陵ハ花の多き地なるゝ其名花を一月多〳〵ん〳〵金陵ハ建康府在

歸鄐歌鶯更逗留於孤雲之路辭林

陸侍郎

鶯と春の初鄐ゝゝ出て歌ひ春暮て鄐ふ入る春ゞ殘閏春と閏て更
雲路に逗留ゝゝやゝらふ花ふ舞蝶も春盡る迄林を辭ゝ去ゝゝ今一

舞蝶ハ還翻於一月之花

源順

鄐ふ歸歌鶯ハ更
ふ孤雲之路ふ於
逗留ゝ林を辭も
る舞蝶ハ還て一月
の花を見
今年の閏ハ春三
月ふ在剩金陵一
月の花を見

之花ハ於翩翩と

花ハ根に歸て悔
也ども悔に益無鳥
ハ谷ハ入んしを期も
也ども定て期を延
らん

鶯

雞既ハ鳴て忠臣
旦を待鶯未出
未遺賢谷ハ在

月春のりとて還一月花の上に綿綿く谿と谷の字儀ぬとよう少
差どをこてゝ用ゐ〳〵○これハ今年又春のりと云題ゆて作る詩の序〳〵

花悔歸根無益悔鳥期入谷定延期

清原滋藤

春暮ぬと花散て根ハ歸り猶閨の春のりと悔ども益ぬ
鳥谷に入んと期くるに閨月ありと聞く定その期を延るのん

古今
櫻もちゆくゝ也ゝ新ぐ年ぐ春ぬ人のゐるあるもやハする　伊勢

櫻の花の賞せらるゝ春一月閨加る年まるあさらもハせぬと古今
まハあるもやハせぬと有夫るゐハ春ぐゝ此春ぐゝうるあるもハせぬと櫻云

鶯

雞既鳴忠臣待旦鶯未出遺賢在谷

鳳を王とする賦〳〵鳳凰ハ羽虫三百六十の中に王なるもハ性仁にして　賈島
帝王ゐるゐ〳〵餘鳥ハ臣民〳〵雞の旦を告るハ鳳の忠臣鶯の未谷を出
ざゐ〳〵遺賢かくれ居て鳳の朝に出ざるゐたゝ晉の趙盾ハ昊公に忠諫ん
昊公怒て力士鉏麑に命じて刺しむ麑趙氏の家に忍入て司ふ盾衣冠

を粧ひ朝せんとするに早宮服のまゝ半て仮寐なゝ盾ゐ待その儀
を見て是ハ殺ハ忠臣を失ふ止ハ君に信がきこと槐木に頭を觸て
死す史記に〳〵忠臣盾を待の故事〳〵賢人いまゝ〳〵擧用らるゝ
遺されゐハ殷ゐ太公望磻溪に釣ゐ周に伯夷叔齊首陽に入秦に四
皓商山にこもり漢ゐ嚴亮孤亭山のゝ〳〵ぬゝひ政の正〳〵くゝぶる
を怨てかくれゐるゐ遺賢といふ聖人上に在てハ下に遺賢ゐ

誰家碧樹鶯鳴而羅幕猶垂幾處花
堂夢覺而珠簾未卷

謝觀

誰ゝ家ゐや碧の樹ゐ鶯鳴て羅の幕まゝ映ゐ絞らず猶垂てゐり幾
ゐ處ゐとも〳〵く花やゐる堂に明〳〵夢覺る比珠の簾も未卷揚ずゐり

誰が家の碧樹ゐ鶯鳴て羅幕猶垂幾處の花堂ゐ夢覺て珠簾未卷

霧山鶯啼尚少穿砂蘆笋葉纔分
臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池

春のはゝや山〳〵ゐ來啼鶯未幼く聲少て朝霧の内に幾ゐ啼ハ　元稹
云で砂を穿出る蘆の芽笋ゐ似〳〵ゐる纔ゐ葉を分ちひら〳〵早春のゐ也

霧に咽山鶯ハ啼て尚少り。砂を穿蘆笋ハ葉纔かハ分てり
臺頭に酒有て鶯

容殘呼。水面ハ塵無
シテ風池ヲ洗

鶯聲ハ誘引ス
シテ花下ニ來。草
色ハ拘留セラレテ
水邊ニ坐ス

同類ヲ相求ルニ於
感ジテ。離鴻去雁
之春ノ轉ニ應ズ。
異氣ヲ會而終ハ
混ズ。龍吟魚躍之
曉ノ啼ニ伴

思黯と云人の別莊を云ふ其墨に酒を用意して有鶯ハ流を勸んと轉て客を呼庭の泉水は塵なく清ければ風ハ池を洗ふ也

白

鶯聲誘引來花下草色拘留坐水邊

鶯の聲に誘ひ引て花の下にゐると出若草の青ハめて拘留らるゝ水を打めつゝ芝をしに坐せるゑ此詩ハ春の江ハ題じゃ

白

感同類於相求離鴻去雁之應春轉

會異氣而終混龍吟魚躍之伴曉啼

大内に諸臣を召し宴ありて題をのり詩歌を賦すを内宴と云是も鶯の轉ハ管絃に韻を題よのり詩を作る序文ハ鶯と類を同ふ

菅三品

ものゝ求ハ春鴻や雁ハ北の胡国へ離を去時ハ鶯の轉に比て應ずるを琴に離鴻去雁の曲春鶯囀の曲ハ云ふ又類を異にするゑのゆゑ管絃ハ混ハ龍吟魚躍の聲有て鶯の曉の啼ハ相伴ふ漢の馬期字ハ李長曉堤を行られ龍水中ハ啼と二声して天ハ上る聲高くすゝて哀し行を鑄て吹其声を摸す笛是より始る龍吟これ殷の湯王洛水に壁沈て魚躍び躍其声哀しうして魚躍の曲と云

燕姫之袖暫收。猜繚亂於舊拍。周郎
之簪頻動顧閒關於新花

同上

燕姫之袖暫收。猜繚亂ハ舊拍ハ小於猜周郎之簪頻ニ動て顧閒關ハ於新花ニ

前と同ぶ序文ハ漢の明帝后ハ趙飛燕と云ハ躰軽さして燕の飛ごとく舞の上手ハ鶯の音を管絃と思て奏るゆゑに拍子ハ繚亂るゝの色らぬゆゑ拍ハ舊く朽てかくあるゝと猜て暫し舞を止る意を袖收と云て拍ハ樂器一よびんざらと訓ず呉の周瑜字ハ公瑾能舞り鶯の轉ハ樂に韻和て一ハ面白く新くなる花に閒關くゝを顧るゝびに簪ハ動しそ間關ハ詩に睍睆とある同じ轉く郎ハ周の郎ハ姫ハをゆでと云て

新路如今宿雪舊巢爲後屬春雲

鶯ハ初春谷ゝ出る新なる路ハ宿の雪を穿ていづるのゆゑ宿雪去年なる雪ハ春に消殘ゝ舊巢ハ春過て後歸へん爲ゆゑ雪に屬來ゆん

菅丞相

西樓月落花閒曲中殿燈殘竹裏音

内宴に曉の鶯ハ宮殿近く轉る心の題をのびしれば大内を云ふ西樓ハ白虎樓中殿ハ清涼殿ハ神璽宝劍を置御帳の四方燈あり掻灯を

菅三品

新路ハ如今宿雪
を穿舊巢後の
爲に春雲ハ屬ら
ん

西樓に月落て花
閒の曲中殿に燈殘
て竹裏の音

いと暁まで消残るを云月の西に落るを明旦の景氣で花の間竹の裏ハ
鶯のあるべき處ゞ曲と音とハ囀を云一説ハ西樓ハ霽景樓を云と

拾遺　あしたの年をうぐひすのこゑのかしこまるうまうまとこのハるれば　素性

あしたとハ磨ざる璞を夫を碓そみがくあるのとゝ
る枕詞なり又ハあしたゆるの畧ゝとむとも云

わさみどり空さへ霞ぬるゝ　新勅撰　麗景殿女御

淺緑ハ空の色うす緑なり又松のみどり
春ゝとのゝ春立ゝとゝ　林言葉

うくひすのこゑなつかしぬ山ゐ、いで来をたゝ　中務

拾遺集に中納言朝忠とあり深山幽谷雪ゆ中とゝ
鶯ハ春を忘ぎず初音を發此鳥ゝハ冬の心ゝ在べき

霞

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

霞光曙後般於火草色晴來嬾似烟

曙の後霞ハあくひのゝ火ふたとよ春の空緑に晴來て
若草とく出るゞ烟の立ゝるゞし火の字に烟を以類也　白居易

鑽沙草只三分計跨樹霞絶々半段餘

春あさく餘寒殘る題也沙を鑽ぶり芽を吹若草只三分計
そ延るゞ捐ふる霞いく段も鬚鬘ゞ寒ゝれば一段ゝも足ぬ　菅丞相

五葉　きさらぎ初年ハ暮しうま春ハ春日の山にもやゝもふりう　人丸

年の終ハ昨なり今ハ春とてもやゝ霞てゆるゝとゝ
のう濁るべきを清てゝみ來る春日山ハ大和の名所なり

雲霞ゝそるやいづこみちゝ春の山に雪ハ降ゝ　赤人

古今集ゝハゝみ人ゝ大和国三吉野郡ふある山也みゝのくゝは
の山とづゝあるゝとゝ他所ハ霞をゝも春ゝ紀ゝゝ聞ゝれハ何取

うやゝゝゝ山ハ餘寒ゝ春ゝ紀ゝゝ雪ぬゝて

春ゝ紀ゝゝ雪ぬゝて

胡月さゝ雪ぬゝ雪の霞ハゝれゝゝふりう　蘇頌

雨

或ハ花の下に垂と
して。潛に墨子之
悲を增。時ニ鬢の
間ニ舞て。暗に潘
郎之思を動す

長樂の鐘聲ハ花
外に盡。龍池の柳
色ハ雨中ニ深

養得て自花の父
母爲洗來てハ寧
藥の君臣を辨ん

花の新に開る日
初陽潤。鳥の老て
歸時薄暮陰り

斜脚ハ暖風の先扇
處。暗聲ハ朝日の
未晴㊌程

もとゆるくうちもとで
飲ふちよだす

雨

山樹ハ枝葉まで土中の水氣を吸て含める故日ニ蒸されて雲となれり昇る其氣ハ雨と成て降る

或垂花下。潛增墨子之悲。時舞鬢間。
暗動潘郎之思。

江以言

密雨散て糸のごとく題の詩序に墨子名ハ翟練る糸を見て悲あり深あぞ黄ハも黒ハもなれど人心の一圖なるごとく糸のごとく是ハ數へ今春雨の花ハ降垂ハ糸ハ悲を增ん潛ハ心のうちハ潘岳字ハ安仁晉の代虎賁中郎將ハ六十の歳鬢ハ白髮ハ二筋生るとも安仁作る秋興の賦ハ書り文選ハ出此ハを作て春雨ハ糸のごとく鬢の間ハ舞るを是も鬢糸ハやと思へ郎ハ男の

長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深

漢の高祖長樂宮を建内ハ鐘を架時ハ其聲遠く聞ハ花樹の外まで盡し謝承武陵郡の寺ハ有る黄龍

李嬪

有て其地の水中に見る故ハ表を上て賀するて龍池と名つく其池辺の柳の色ハ春雨に一層色深くるもの龍池の上武陵記に出

養得自爲花父母。洗來寧辨藥君臣

紀納言

春の雨ハ潤ひ養て花ハ咲する父母の子を育るごとく医書に君臣佐使の別あり其病を治する主藥ハ君藥ハ君藥ハ

つよ藥を佐使とし雨ハ花ハ藥なれども頻に降來て藥の君も臣も辨ずして普く洗ひ〻〻ぐ寧ハ分んでと云心此詩仙家の春雨の題を作る

花新開日初陽潤。鳥老歸時薄暮陰

菅三品

春の巴雨中ハ尺〻と云題の花ハ春雨ハ開さ雨間ハさ出る初陽潤て見ゆると云へ春深鳥の音も老て歸る薄暮の雨ハ陰る景色ハ

斜脚ハ暖風先扇處。暗聲朝日未晴程

慶保胤

余く降雨の脚ハ暖ハ吹東風ハ扇るとて斜なり暗ある夜の雨の聲ハ朝日いまだ晴出ざる程ハ〻て旭さ昇る比ハやそ霽べきごと

拾遺

撥ぐりあるゆり寸ぬ所〻くハぬるともぬのうげに浸ん淺人愛

梅　付紅梅

白片の落梅ハ澗水に浮黄梢の新柳ハ城墻に出

梅花雪を帯て琴上に飛柳色煙に和して酒中に入

野山をこけて櫻花紙を敷るをさめ〜狩と云隆來雨に濡るともしても花にちらして來られぬこの花の陰ゆかくまんとの意歟

新勅撰　春雨の露柳の枝にうるハ絲を以て玉を貫でくこゝるとゝ　又いと春雨の露柳の枝にうるハ絲を以て玉を貫でくこゝるとゝ　又いとうつてを畧すとつの字人の詞の内ゆあつて外へあ〜れぬハうつてをうつと云　伊勢

梅　付紅梅

白片落梅浮澗水黄梢新柳出城墻

梅の花片白きが澗水に散浮び新に芽を吹て柳の梢の黄なるが城の築墻よりさゝ出る　山の水を夾を澗と云〜にと訓ず　白居易

梅花帯雪飛琴上柳色和煙入酒中

白梅の散來るハ雪を飛すゝる晉の師曠と云樂官四月白雪の曲を彈ゝるに天大に曇て琴の上に降來〜と云を取もり青柳の下ゝ酒を飲で緑の色が盃ゆうゝ煙ハ青さをのなるハ柳の色を煙と云ゝ紅ハ混ゆ合へ陶淵明閑居の門ゆ柳五株あり其下に酒を毒を取ゝ　章孝標

漸薫臘雪新封裏偷綻春風未扇先

臘ハ獵く十二月獸を取て先祖を祭るゆ臘月と云日ハ漢ゆ　村上御製　戌日魏ゆ辰日晉ゆ丑日を用今ハ大寒ゆ近き辰日を臘日と云　寒梅は臘月新に降る雪の封る裏ゝ漸薫ゝ春風いまゞく扇來らざる先ゆ偷綻て咲ゝるとゝ　寒梅早花紙結ゝ云題の御製なり

青絲ゆ出陶門柳白玉裝成庾嶺梅

晉の陶淵明名ハ潛門に五本の柳を植て自ら五柳先生と云其柳が春風ゆ靡て青き絲を綫出すごく大庾嶺ハ唐土五嶺の一つゝて白梅多〜一其咲ゝるハ白き玉をゝつて裝ぐり成ゝるごゝ　後江想公

五嶺蒼蒼雲往來但憐大庾萬株梅

大庾始安臨賀桂陽楊陽の五ゝ嶺蒼々とゝある山の端に雲往來ざゝふもゝ人ゝ其中に大庾嶺ゝゝハ萬株ともゝく梅咲て但憐　菅三品

誰言春色從東到露暖南枝花始開

漸薫臘雪の新ゆ封ずる裏偷て綻春風の未扇先　青絲綫出陶門の柳白玉裝成庾嶺の梅

五嶺蒼蒼て雲往來す。但憐大庾萬株の梅

誰〻言春色東從到と露暖ゆて

南枝花始て開

煙柳色を添て青
小猶淺鳥梅花を
踏て落と已に頻
なり

上に通じて絶句一章に春東より到れハ譏言で南ハ大體ぬ暖かバ花も南の枝早く開ハ南より來ることを云べしと大庾の梅南枝先開 坤元錄

煙添柳色看猶淺鳥踏梅花落已頻

煙ハ柳の青きを云春ふかくなるまに柳の色ほ添てんるてあるぬ 萱島
を猶淺と作り鶯ゐどの花ふるり梅の散一ゐの詠物ちがへ

○或説に堀河院の御時右衛門督師賴卿此詩を書加へらるるし無題の詩と信阿が説のよ

万葉
いめ年ぬこそ地一我宮のゐ樹の蕊ハ見ぬ時よりゐ 安倍虫麻呂

往一年ハ過一年に根越てハ
根をかりてん

万葉
我せこに見せんと思ひし梅の花それも見るしるし雪のふまてぞ咲へ
夫をせこと云ふまてぞハ降られぬ我が夫ぶんせん思一を
雪踏りて梅の花とも見んとうぬと女の心ちりてあるく

拾遺
雪ふりて梅の花とも見んとうぬと女の心ちりてあるく

とめて心に認て人わやがハ無益に梅が香の霞をりく〜をまある春の霞
ぶ梅の花をいふ立隱とも香は認て尋るるバ誰人ぞ折取ざん霞の隱も詠

紅梅

梅含雞舌兼紅氣江弄瓊花帶碧文

雞舌ハ丁子に其色赤く雞の舌ふ似られぐ雞舌香と云順が 元稹
和名集ふ説あり梅ハ雞舌香を含の香あるのるるに紅の氣を兼ぬ

瓊ハ赤紀玉に仙宮の樹を瓊樹と云江ハ岸の紅梅の色をうるて
仙家のあり紀玉の花咲樹を弄ふ似て水ハ碧の色の浪の文を帶り

淺紅嬋娟仙方之雪媿邑濃香芬郁
妓鑪之煙讓薰

仙人の藥方ふ縫雪玄霜あると云梅の淺紅の嬋娟ハ彼縫雪も及ざれバ
邑を媿る濃香の芬郁ハ妓女の燒薰る香爐の烟も及ぶ匂を梅ふ讓 橘正通

淺紅嬋娟仙方之雪媿邑濃香芬郁
妓鑪之煙讓薰
邑有て分易殘雪
の底情無て辨

有邑易分殘雪底無情難辨夕陽中

難夕陽の中

仙臼風生て空く雪を鞍。野爐火暖まして未煙を揚ず（未）

紅梅の色ハ消残る雪の底にも分ちやすし　夕陽のころの中央日の紅ふハまがひ情ありては辨へがたし　前中書王兼明

柳

仙臼風生空鞍雪野爐火暖未揚煙　紀済名

紅梅の風に散るハ仙家ニ臼き雪を搗て薬となすを臼より箕に取て鞍に似たり元より實の雪ならねバ空と云ハ山の高きより見たるをぞ

野中に咲たる紅梅が爐火の暖まるごとくみゆるされども火ならざれバいまだ煙を揚ずと作り野と冶と音通ずれバ鍛冶の爐ハ共

古今

君ならで誰にかみせん梅のはな色をも香をもしる人ぞしる　友則

色をも香をもと云ハ紅梅と知る心をしらぬ人に物せんするハせんなし　此歌ハ梅を折人に送るとてよめるなり

新古今

色香をば思ひも入ず梅の花常ならぬ世によそへてぞみる　花山院

人の花をめづるハ色香をふかく思ひいれど心ある人の詠ハ何の上にも無常を観ずれバ花のさかりも春深て一朝の風雨に散と人此帝早く位を退て佛門に入給ふ

林鶯ハ何の處にか箏の柱を吟ず。墻柳ハ誰が家にか麹塵を曝す

漸他の騎馬の客を拂んと欲す未多樓に上人を遮得ず（未）

巫女廟の花ハ紅にして粉に似たり。昭君村の柳ハ眉よりも（於）翠なり

柳

林鶯何處吟箏柱墻柳誰家曝麹塵　白

林に啼鶯の音が箏に柱をたてて彈じ吟ずるやうに聞ゆる鳥ハ何の處に止り居るや　秦の蒙恬箏を作る又箏の曲に春鶯囀の名あり

墻の柳芽を吹て麹塵の色なるが風になびき黄なる糸を曝したるハ誰が家ぞと云麹の塵ハ黄なるその色へ麹塵ハきいろと云こと前にも出

漸欲拂他騎馬客未多遮得上樓人　白

白氏が樓の西に新柳の條延出たるを美して作るまづ新に出たる若枝ハ漸騎馬の客を拂ふくらゐにて未だ一位高く樓へ上る人などハ未遮得ず

巫女廟花紅似粉昭君村柳翠於眉　白

昔楚の襄王陽臺に行晝寐の夢に神女に交別に臨んで我ハ巫山の陽にあり朝にハ雲となり暮にハ雨とならんと夢さめてかの神女を祀られしより是を巫女廟と云此所に花多くあれが神女の化粧の紅粉に似たると云意漢の元帝の宮女に王昭君と云美人あり其住し邑歸州の東北四十里にありと云美女の住し村の柳なればバ眉よりも翠なりと作るなるぞ　次の句に通じて一章く

誠ハ知老去て風情の少と雖此を見て爭ふ一句も詩無らん

大庾山領之梅ハ早落。誰ゝ粉糍を問ん。匡廬山の杏は未開(未)。豈紅艷ならんや

雲紅鏡を擎扶桑の日。春黃珠を嬾す嬾柳の風

誠知老去風情少見此爭無一句詩

前の詩ハ通じて絶句一首ハ誠に年老去ぬれバ何ども興少し若時かりせバ此廟の花村の柳を見ていざ一句の詩をかんぶん老てハ是ぞ

大庾嶺之梅早落誰問粉糍匡廬山之杏未開豈趂紅艷

江相公

大庾山領の梅ハ皆白花ゝて白粉を粧ひ是もすでに落てハ誰ゝ粉粧を思問ん廬山の杏ハまだ開ずあれ今ゝ其紅艷なるを趂ゝ見ぬべきされど梅と杏の間ハ柳の翠の色をして弄ぶしと柳を題す詩の序文也かく云ぞ又周の成王の時匡廬と云人廬をむすび山ゆ匡廬山と云ぞ

雲擎紅鏡扶桑日春嬾黃珠嬾柳風

初日の出る雲が紅の鏡を擎るに似ゝ扶桑ハ東方の海嶌なり唐ゝ日本を扶桑と云一文もあり東方ゝ云も東ハさゝるを旭と云意ぞ嬾柳ハ芽をふくめる黃なる珠と云ぬるを春の風が嬾す是早春の作なり扶桑の說淮南子ハ出

田達音

秋宅迎晴庭月暗陸池逐日水烟深

秋宅晴を迎て庭月暗陸池日を逐て水烟深

潭心月泛枝交桂岸口風來混葉蘋

潭心に月泛て枝を交る桂岸口に風來て葉を混する蘋

秋宅迎晴庭月暗陸池逐日水烟深

柳の繁花題して作り秋康字ハ叔夜柳を植て愛せり後中書王真平ゝ陸慧曉が宅の傍に池ありて陸ゝ池辺ハ柳有て見ゝ池の水ハ柳の色ゝ烟と見て陸ゝ池日にまして水煙ゝ柳のやゝ〳〵ゝ

潭心月泛交枝桂岸口風來混葉蘋

柳が垂て水を拂ふ題を作る潭の心ゝ月の泛やどる時月中ハ桂ゝ岸の柳の水ゝ枝垂と枝を交す岸の口に風吹來る時水上の蘋と垂柳と葉ゝ混じてひとつゝ

管三區

青柳の糸ゝかゝる黑もてみゞれゝ玉をぬびかる

青柳なびくゝ花と咲交りゝ糸と云ゝ乱き綻と自然ゝ縁語をつゞ

青くれなゐもゝゝ柳ゝ糸ゝいとゝくゝ

花付落花

花上苑輕軒駟九陌之塵猿叫空山斜月瑩千巖之路

張讀

右の詩一本に載られども多く数よりとびて紙を尽さず

新千載集　柳のまゆにこもりて糸のみだれこそ

柳の芽を含いまだ葉を出さぬ枝にこもると云て螢の蘇小糸のこゝろ

小唯柳春を賞ずべ春來て色まさるとゝ云又くるハ糸の縁語

花付落花

花明上苑輕軒駟九陌之塵猿叫空山斜月瑩千巖之路

漢の武帝宮内ふ苑とひ上林苑と名づく其花盛明ゆと花見の公子公卿の輕紀軒をゝおじ九重の阡陌を往來一人蹟をげく塵駟てふ駟と繁花を云て下に幽閑を云空山ふ猿叫ぶ比有明の月斜よ千萬そゞぐる巖の路を照一瑩とへりと閑を題セ一駟へ

池邑溶溶藍深水花光焰焰火焼春

池水の色青〳〵藍ふ深るゞ〳〵花の紅ゞ光ゞやゞ紀火のごく春を焼と云て景色花ふやまず意〳〵溶々ハ水盛なる貞焼々ハ火ある貞

遥見人家花便入不論貴賤與親疎

春家〳〵の園林の花を尋る題を作る貴も賤も親も疎も〳〵花見ゆ入春のあそびのさゝめなり

瑩日瑩風高低千顆萬顆之玉深枝

深浪表裏一入再入之紅

天曆の御時花光水上ふ浮題して文人の試行もし其日の詩序く花を玉て見ゆ一日に瑩ゞ風にみゞくと云高く枝て咲る花低く水ようゝる影もれゞる多ゞを千顆万顆の玉と作る下の句ハ花を紅脂薄紅再入ひ〳〵せ濃くいろ〳〵梢と浪をゝむると云ひ表又ハ裏一入ゝもて

誰謂水無心濃艶臨兮波變色誰謂

焼

遥ふ人家を見て花あまで便入貴賤と親疎與を論ゼ不

日に瑩風に瑩高低千顆萬顆之玉枝を深浪を深表裏一入再入之紅

誰ゝ謂水心無と。濃艶臨で兮波色を變ず。誰ゝ謂

花語不と輕漾激して影脣を動す

之を水と謂んと欲すれば漢女粉を施す鏡清瑩なり。之を花と謂んと欲すれば亦蜀人文を濯ぐ錦粲爛なり

織とハ何の糸自ぞ唯暮の雨裁て定まる樣無春の風に任

花不語輕漾激して影動脣

同上

前に同じ。序く水心をとハ誰か云ー心あるべしを花の色濃艷なるが水に臨むときハ波の色を變じ人の顏色を変ずるに似たり花語

已誰輕漾激あるとすれバ水ようゝる花の影脣を動ー人のくちびるをうごかしたる語どー

欲謂之水則漢女施粉之鏡清瑩欲

謂之花亦蜀人濯文之錦粲爛

順

花の色水に浮を題する序く花の影ゝゝゝる水を汲てこれを水といえんとすれバ花とハ水とも思ハず漢の宮女が面に紅粉白粉を施鏡の清く瑩なるを思ハず蜀の國の人が錦を濯文の粲爛なると思ふ〻〻蜀の成都に〇彼国の織とハ天下に名高日本伊豆の八丈嶋より出る縞織に似たり

織自何糸唯暮雨裁無定樣任春風

花飛て錦の如く幾濃粧織者ハ春の風未箱に疊

始て識春風の機上に巧なるを唯色を織のべて非芳芳をも織り

眼貧蜀郡裁殘錦耳倦秦城調盡箏

花の錦ハ何なる糸を織出すぞと思ハ唯暮の雨を糸ふ織るを春雨糸の如く降とのべ又此錦を裁ハ定まる樣に春の風任

菅三品

花飛如錦幾濃粧織者春風未疊箱

花の錦の色〻幾〻くとも濃る粧ひなるを此錦を織成者ハ春の風なれバ畳あげて箱へとちさめず。次の句ハ通ー章

源英明

始識春風機上巧非唯織色織芳芳

前に通して絶句一章に今ぞ始て春風の機上に巧なるを識り美ー色を織出すのべ芳芳わりまで織成り

眼貧蜀郡裁殘錦耳倦秦城調盡箏

春の末花も少く鶯も希なる題を作る眼ハ見るッニッの義花ハ蜀江の錦の裁殘なれ貧耳ハ聞く鶯の音ハ春鶯囀の笙の曲聞倦るべ調盡て今ハ声も少ふるまり秦城ハ秦の都を云箏ハ秦の蒙恬造れ

源相規

去て中にうゝ機のなかの女ハ素のむかのどもうゝ

葉平

櫻の花ハ咲をまち散ヲまち雨をうらみ風をうらみて花をうんと思ふ人の心いかでうらぶれぬ世ヲ櫻と云ものの絶てなく春の人心さて長閑ヲわん

古今
我宿の花ハうつりにけりないたづらにわが身ハ世にふるなガメ　紀友則

櫻花咲くを見ヲ來りて人にたゞへ花かゝりて尋も來る花ちくハ間も來

ほトの心ぞいとゞ散てなほ後ぞこひしうんと云ガ情ハ

古今
人てのみやこかゝん櫻花ゆゑにわて家ゝとハせん　素性

人ヲ語聞をるぞうハ物ちぐれで花を折ヲ挿もて
家ゝの土産ヲせんとて つとハゝゞげ又裹ケり

落花

落花不語空辭樹流水無心自入池

元氏の舊宅を過るとて心を傷めて作る花ハいとゞこひしなぐ空しく樹の枝を辭し去て散落流る水心なくしてもち入言外ヲ閑寂あり　白

朝踏落花相伴出暮隨飛鳥一時歸

落花

落花語不空樹流水無心自入池

朝ハ落花を踏て相伴て出暮ハ飛鳥に隨て一時に歸

春花ハ面面酣暢之筵晩鶯聲聲講誦之座

太宰の帥宮の御前に史記を讀ム文士並居て宴ケのう酒も酣にして心を暢る筵席に花を心ありて面々闌入とく日も晩くるの鶯聲くに

李二とゝ出日暮ハ飛鳥もあのが栖ヲくるゑ一時ヲ白居易と李二と家ヲ歸

白

相伴て落花を踏

春花面面闌入酣暢之筵晩鶯聲聲

後江相公

豫參講誦之座

後江相公

落花狼籍風狂後啼鳥龍鐘雨打時

狂風の後散ぬる花地ヲもて狼籍雨ハ打る啼鳥ハ

後江相公

啼て史記講ム誦座ヲ豫參

闌ハ妄に宮掖ヲ入

落花狼籍風狂後啼鳥龍鐘雨打時

行不進負　又龍鐘切癰ヲてつるゝと云ヲ二字ヲのぐるゝ

離閣鳳翔憑檻舞下樓娃袖顧階飜

散る花ヲ風ヲひゞくうぐひす鳳凰の閣を飛離ると又立くり檻に憑とゝて舞ヲぐると鳳を花ヲ面ゝ

菅三品

閣を離る鳳の翔ハ檻ヲ憑て舞樓を

下娃の袖ハ階ふ顧て飜

閣を樹る檻を枝る人くそう舞妓が奏終て樓ふ下るる階ふ下れてハ
ち紙顧袖を飜舞と娃美女人花ふたとふ樓を樹に階を枝ふ譬翔ふ翅作

拾遺
桜ちるなれば風をさむうて雲ふ乱れぬ雪ぞふりける　要之

花の散ふ雪と見ふ雪ふる空風さむきものるる
さわぐそのどうける空ふ舞ハ花の雪ふるとぞ

拾遺
とのゐれどものこゑやつくんあ〜ばひをばう相ざこ矣すれ　公忠

紫宸殿の御前の櫻の花散を見てあるくとのゐハ主殿寮く禁中殿庭
掃除のてゐるじを司るともけもつとハ主殿つるの下部伴氏なる御奴之一說ハ
臣をともと呼臣のこゑつこへとゐう　落花がおしろきん掃んとを
かゝて朝の掃除をもれしのあ後ゐう

躑躅

山石榴の名躑躅ハ安〜ぢる負羊山榴を食躑躅
して死にて羊躑躅の三字そつじく

晩蘂尚開紅躑躅秋房始結白芙蓉

紅の躑躅の晩蘂がゐるて尚開白芙蓉也ハ始て秋の房ふ結ぶ　白

是ハ元十八ゲ侯の住家を作まる人下の句ハ秋の景物ゐく

夜遊の人ハ尋來て把んと欲寒食の家ふハ應に折得て驚應

款冬〜
雌黄を點着て天に意有款冬誤

夜遊人欲尋來把寒食家應折得驚

夜遊ぶ人が躑躅の紅蕊火と心得燭ふ把んと欲寒食の　源順
家ふ折て火ゐると思ひ驚ゐん荊楚歲時記ふ冬〜至後百五日ふ疾風
甚雨の後寒食と云と此時三日の間世に火を禁ド冷物を食す晉の文
公いまゞ公子ゐし時國の難を避て亡ゐう介子推と云臣五人の英雄公子
ふ從ひ忠節を尽ゐ〜ゐ後文公入て位ふ即て各恩賞ゐ介子推のミ其
事なしゐ怨て母と後とも綿上山の奥にかくゐる文公是を出さんとて山に
火ゐ放ゐるち樊の〜母子樹ゐ抱て燒死す文公悔悲て火ハ賢人を失
ものゝ〜とて国ふ禁じのひ故事今に殘る此詩山石榴題して火ふ似ゐる題人

今ハ戀の哥ゆゑよみ人をばとゐう思ひ出る時ハこひしきものゆかくゐも云ぬ
心ゐ〜ゐ〜ゐ山城太秦の北ふ常盤山あり時ハ去けいとゞ岩根ふ云ひけゐう　平貞文

款冬〜

本草ふハ冬〜花咲とあり今春の末の山吹と云ゐの漢名
知ずゐ和名集ふ款冬ゐ也未不木とす和歌連俳異〜

點着雌黄天有意款冬〜誤綻暮春風

て縦暮春の風

書窓に卷有て相收拾。詔紙に文無して未奉行せ（未）

處々に款冬の咲るハ書の誤ある処へ雌黄まして點を着るゝ
されど款ハ愛く親人の字訓ふて冬を數るゝ冬く咲るにわやまつて春の暮縦ひ
清慎公

る紙あやゝ天も其意有てゝそ
雌黄まてかく點を着るゝん

書窓有レ卷相收拾詔紙無レ文未奉行セ

款冬の黄小咲るハ書を まるゝ窓に朱軸黄卷とて黄蘗ふ
深る紙卷あて收拾ど詔書ハ黄紙を用る也山吹の邑ふたよふ詔
保胤

紙ふ似られども文字なられぬいまゝ何の詔と
いふと紙奉行ずとなり

新古今

かたずなくこの夕なひ川よ急く今やいん山吹の花　原見王

神南備川山城大和二ヶ所ありこゝ川とゝ也此川辺ふ來て
蛙啼やまゝ咲きさく面白ふ後の春思ひ出てゝるなり

拾遺

我宿のいと毛ふ吹ふひくゝに春はゝん春のかゝみに　兼盛

拾遺集ふ春みゝ人ちゝ
いとゝぶふいとくゝる

藤

帳望慈恩三月盡紫藤花落鳥闌闌

紫藤の露底殘
花の邑翠竹の煙
中暮鳥の聲

紫茸ハ偏い朱衣
の邑を奪應て
是花の心憲臺
を忘る（應）

藤

帳望慈恩三月盡紫藤花落鳥闌闌

三月三十日慈恩寺まて元十八ふ酬の詩く此寺ハ唐の太子母后の爲
ふ建のゝり藤多三月も盡る也く春のゝゝを帳望ハ藤も散鳥啼て
白

をのあんもゝなるゝ闌々ハ鳥の鳴良唐の太子ハ後高宗皇帝と
云母后ハ穆太后なり此詩ふ鳥と云を鶯と云解あもゝ限ゝ

紫藤露底殘花邑翠竹煙中暮鳥聲

四月ふなる春の殘る題なり　露の底に藤の散殘るゝ
紫の邑をゝゝ翠の竹ふ煙のゝくゝゝる中に暮の鶯ふ啼
源相規

紫茸偏奪朱衣邑應是花心忘憲臺

彈正大弼の亭まて藤の花ふ宴て作る　彈正ハゝゝゝすの字まて
外の非違を糺すとを司ゝる唐官御史臺憲臺とも云て不法ふ正
順

てゝが相當ふり論語に紫ハ間邑ふて正ゝき五邑の外るれども惡て
朱の邑ふ殘奪ふを惡と云とあり邪路の正道を乱すをかくむ心是

のとづゝて藤の紫が五位以上の着すゞき朱の袍をうぞふ是ハ花の心
か憲基　彈正をハ非法を糾す官なる忘もうるゝん官位令　小彈正太弼
のや正五位下ふわゝるよゝんゝう主の朱袍の色ハ庭前の藤がうだふと云
て却てさゞう藤の美しをを称るゝ紫茸ハ藤の異名

拾遺
田子の浦とこさく匂ふ袴のふ紫ごゝてもんゝぬゝのをゝ　縄丸

拾遺集ふハ夏の部ふ入れ丸家の集ふのり駿河ふ田子の浦あり是ハ越中の
多枯の浦の歌と云底さゝハ底まゝゝ藤の影水ふうるを底まゝもふふ程
の花を我のゝゝんるも本意ふれゝでゝぶ持行く
人まもゝんせゝゝとゝ又藤並ハ浪ふうせてゝむとゞ

続古今
ゝゝそゝるる松のなゝゝそふあやるくもかゝもる蔭の咲てちゝれ　貫之

常盤ふ散とゝを松に咲てゝる藤のたゝふくちるとゝ無益も
名ゝゝがゝゝと藤のちゝるゝゝむあるゝかくゝみゝゝゝ

和漢朗詠集抄巻之一　終

夏
更衣
壁に背る燈ハ宿ハ
経焔残一箱を
開衣ハ年を隔る香
を帯なり

和漢朗詠集抄巻之二

夏

更衣　春の衣ハ夏に成ハ更ル衣ふ更ゝ帛の御帳生絹ふ胡粉まて繪をうゝ壁代ゝゝる徹一御畳ゝゝ
御服ハ御直衣すゝしの綾の御むとゝ御張袴女房の袷のきぬ共
更衣のゝとゝゝ当ぬすゝ裳ハ上鶉薄をの小上鶉ゝす色常の
ゝ所ゝゝ御裝束掃部寮ゝゝゝ御服ハ内藏寮ゝゝ奉る
十月朔日又更衣ゝゝ公事根源江家次第茅ふ季　雲上の行ゝ

背壁燈残経宿焔開箱衣帯隔年香

光を此方ハ向ゝハ壁ハ燈の背ゝゝる霄ゝう挑て曉ふゝゝとゝば
一宿経ゝる焔を残一今朝ハ更衣ゝて箱を開て夏衣ゝ取出せバ去
夏の年を隔ゝる香ゝ　白
こゝろあれ

生衣ハ家人を待
て着と欲宿釀ハ

生衣欲待家人着宿釀當招邑老酤

當に邑老を招て酣なる當

菅公仁和の比讃州任国より下居て作るふ生絹乃夏衣ハ家人の裁縫を待て著んと欲宿醸かりる酒ハ邑の長老人を招て飲んと思ふ賞翫して醉ふ及ぶを酣と云燕の召伯一月ふ三ゝび邑老を招て桃樹ふ會せ始まるく作るふ成

拾遺

池の水ぬるくなりぬ春の花の色香ふ染みる衣ぬかえるとて袋ふるも

首夏

首夏

甕頭竹葉経春熟階底薔薇入夏開

甕ハ酒を貯ふ器へ宜城より竹葉酒を出す冬制衣春熟ゆ　白

堂へ升る小階わり其底の薔薇夏ふ開を云此花ハ春より夏ふいたる

苔生石面輕衣短荷出池心小蓋疎

苔ハ短きもの石の面に生ずるハすじ〻ゝどの輕き衣を否ふ著せらるゝと荷の葉ふ池の心より生出まぶ小ゝ蓋のゝ〻ゝ疎なる初夏也　物部安興

出て小蓋疎なり

拾遺

我庵のかき根や春ぬらん夏来かりとゝんめる卯の花　作

垣ハ隣を隔るふりなゝ春をへぶりと云又夕の花ゝ〻ゝく春の花を忘る心あり

夏夜

風吹枯木晴天雨月照平砂夏夜霜

江の邊なる樓より夕景色をゝめて作もり枯るる木に風の吹声晴るる天に雨ふると聞へ月が平地の砂土を照す時ハ夏の夜ふも霜を置　白

ふると思とるゝ上の句ハ久くの困の體なまゝども下の句そ此よ入　砂一ふ沙ふ作る

風生竹夜窓閑臥月照松時臺上行

軒に近き竹の林ハ風すゝ〻ゝ夜窓を明く臥るゝ松の木の間より月の照来る時ゝ臺の上ふ起行　白

題早夏の獨居と有

空夜窓閑螢度後深更軒白月明初

空夜窓閑ちる螢度て後深更軒白

月の明るる初

空夜ハ月出ざる人宵闇の窓の前に螢飛るこそ閑に寂しけれ　紀納言

やゝ〳〵深更月初てさ〳〵出軒端も白く見ゆる夜を五つ分初更こそ五更

小至その更がうけるを深更と云

夜陰房ふ歸の作なり

夏の夜を絲ぬふ明ぬとひゝ紀人ハ物をや思ふらん　人丸

戀哥なり　もゝ〳〵寢もやらぬまくや明るとと長ハ思のなれふこそ物ものの身

ゆハ短夜も明〳〵ぬるとん絲ぬハ不のぬ明ぬハ畢のぬ絲不にわけ畢ん

家集

わとゝぎす啼や皐月の短夜ももとりしぬるハ明〳〵るつも　同

拾遺集まゝ〳〵みんちゞ独寢をハ明〳〵るつく〳〵の字るの字ハ助字ん

るつハぬるとゝるゞ〳〵皐月ハ五月の異名さゝ月の暑訓ん

古今

夏の夜ハぬるやすけれど郭公なく一聲ふかくぬるめ　業之

志のめハ晨なり

歌の意釈ふ及す

端午

端午ハ五月ハ午の月くゝ五月ハ午の月くゝ五月の午日を端午とふ

べきを今五日を用て午日をそゝ楚人屈平五月

五日初の午日汨羅に陷て死し楚人此日蔣の葉ふ飯を

納五色の糸まて卷水に投じ祭と云又此夜藥露降と云

荆楚歲時記楚国の俗端午ふ艾を以人の形を作り門戸ふかけて毒

氣を去ふ艾人を懸と云是を顯せ〳〵五月五日の時に有て艾人が危く

戸に當て立めや草を束ん人るれで意をなれまに風ふ吹ものとて已ふ摘

取し園までも轉び行ぬ足に任せと云人の故郷と云ども故の園と云

家集

ちゝごまもちゝふにわひるゝ　いのやめ茅ちひをくゝやまゝるぬん　新基

昔内裏まて端午の競馬あり其若駒を追ゝ若蔣を用る又菖浦

草も此時用ゝ生後るハ馬の追をくれて屑るゞ〳〵

拾遺

さのゝまゝでゝゝふ思ひわやゝまりふ我花のつまとなるゝれ　純宣

昨まで池ゝどにありて餘所ハ見を今軒に葺り見ゝそに思人城吾妻と

ちゝゝゝるにゝゝゝゝゝり又物の端をつまとゝゝで宿のつま軒端の意ふ答

時有戸ふ當て身

戸ふ危しと立り。意無

しゝ。故園足に任

て行

有時當戸危身立無意故園任足行

納涼

納ハいるゝゝゝゝゝと訓ず

納涼

青苔地上殘雨を消し。綠樹陰前晚涼を逐

露簟清瑩迎夜滑。風襟蕭灑先秋涼

白

簟ハくもむしろ。青竹もて莚のごとく編まれたるもの。涼臺と云類へそれに夜露を置て清く瑩夜又にもさらに滑るごとくふかる風襟ハ衣の襟に風をふくむ。蕭灑ハもやゝ身にしむ。夏なれども夜ハ秋に先ざりて涼しきぞ。地上の夜境と云題をかく作り

不是禪房無熱到。但能心靜即身涼

白

白居易暑に堪へず。槐寂禪師の房を訪る。禪ハ僧屠の号。房ハ舍。炎暑の熱が禪房に到ざるにあらず。心靜なるゆへ自然と涼しくなる悟の心

班婕妤團雪之扇。代岸風兮長忘燕

昭王招涼之珠。當沙月兮自得

大江匡衡

長忘ざる。燕の昭王の招涼之珠。沙月小當て兮自得ざる

臥て見ん新圖臨水障。行て吟ん古集納涼の詩

池冷て水に三伏の夏無。松高して風に一聲の秋有

炎暑を避て水石に對ふ。題の詩序。漢の孝成帝の後宮の美人班氏婕妤。女官と云が白紈絹もて扇を製り團雪の扇と云。夏手をさゝる況携へ。かの扇も水岸の涼しき風に打捨る。燕の昭王黑玦の珠ありて是を置ハ夏も冷さを招涼珠と名づく。今沙石を照す明月珠。弄ハかの珠を得る心地

臥見新圖臨水障。行吟古集納涼詩

涼の躰を画る屏風。賦に新小圖。水邊に臨む。官屏障を臥て見。又堂に行。臺に行。古人の詩集。ある画ふるを口号。其納涼の詩。よくも画のちゝむさに合ひ画ふるを詩意。ひと起行に吟ずるく詩ハ有聲の画。画ハ無聲の詩といふと宜なり

池冷て水無三伏夏。松高して風有一聲秋

源英明

京六条京極の融の大臣の家あり。河原院是へ此院の長秀上人の坊にて作る。冷ハひやゝく。夏至の後第三の庚の日を初伏。四の庚を中伏。立秋の後初庚を末伏。すべて三伏と云。夏火氣盛にて秋の金氣かゝを伏する義へ。池水すゝく。すゝさを夏。松に吹風涼しく秋の心地。菅三品文時卿評して風高松有聲秋と作るべしと宣ひしとぞ

晩夏

竹亭陰合て偏に
小夏に宜。水檻風
涼して秋を待不

古今六帖
すゞやとあるむしどころ
つゆさへまるとこなつのむ　契々

常夏ハ雖変へ其名れ冷しぬと床
我が居る床のあつさを思ひ知るこゝろは暑で増とよ

新千載
あさゝぐる水か秋をかゝるむすぶ泉のくもゝすゞしさ　中務

手ますゝをを掬ぶと云夏をも知ぬるゝ泉の冷しさを
感じ此下潛水夫ゝもくも秋のゝゝひ來るもとゝあ

拾遺
たりもゝに岩井乃あ、は井むまびわけて変ける年と思りるゝ　恵慶

石は井筒にくゝゝる岩井と云むまび上るハ掬ひ汲なり
河原の院のいづゝのゝゝすゞゝにゝみゝるなり

晩夏

晩ハくゝ

竹亭陰合偏宜夏水檻風涼不待秋

永安と云処の水邊にある亭を作るかゝゝに竹林わの陰を合て　白
透間ゆゝく茂る夏ハ日をゝけて宜水に臨高欄かゝるゝ風涼しく秋を

待かも及ぬく檻ハ
欄杆とふふられど

言ず

夏ゝつるあふぎと秋のゝ
新古今集ゝ壬生忠岑と云
ゝ露もつゝゝもさて
扇とうゝハいづまゝ先へ
ゝくふわんとゝ

中務

夏黒る比扇もうちをくゝゝ
冷しさ

扇ぎともさゝゝわゝゝる神ぶもゝ
ゝゝ

齋宮

拾遺集ゝ藤原長能
ゝゝ

神に祈る禰宜説讃をも聞入のゝ荒神も
ゝゝ夏越の祓して和もるゝ

拾遺ゝ蠅聲荒ゝる神もゝ

花橘

盧橘子低て山雨
重く。枡欄葉戰て
水風涼

花橘

盧橘子低山雨重。枡欄葉戰水風涼

西湖より歸るとて孤山寺を望て見る仏の景色を作る　盧橘子　白
の子ゝ多くゝ多ゝ枝撓低るに山近くゝる雨ふいとゝ重ゝゝかは湖水の
吹來る風涼しゝ枡欄
の葉ゝ戰

枝繋金鈴春雨後花薫紫麝凱風程

春雨か養ひて後熟〻〻る花橘の黄ばみ枝に金の鈴を繋

後中書王

凱風か橘の花の薫る又麝香のごと紫麝ばやく〻其獣の色紫なり

ものぶ云凱風八爾雅毛詩等に南風とあり

こゝは夏の火体の風をいふなり

さつきまつ花橘の香をかぐ人の袖の香ぞする　伊勢物語

古今うみ人もゝびとあり此歌業平宇佐の勅使に下りつゝむと云伊勢物語の歌

を伊勢ゝよみくるゝと取ちがへると云又橘八無仁天皇の御時田道間守を異

邦につかはし非時の果を求めしむ開守ゝ袖に入て来りしゆへむかしの人の

袖の香とゝもむと云又いつの年も五月まつて花咲其香ゆゑ知る人の袖の香喩

時鳥なき鳴ぬるかたみとて形見とすべき物とは思へとも　よみ人しらず

新古今うみ人もゝびとあり郭公花たちばなの香を心に認て

ゝづぬるハたゝもむかしの人のこひしきやとなり

蓮

花を蓮と云葉を荷と云

根を藕といふなり

風荷老葉蕭條綠水蓼殘花寂寞紅

荷葉の老くるに風わくりて蕭條綠〻水辺に生る蓼の花か

散殘て寂寞紅の色あり秋の詩なれとも上の句蓮の縁あつて此部に入る

白

葉展影翻當砌月花開香散入簾風

荷の巻葉か展て開くる月さして葉の動に従て月の影も

翻る此詩階下の蓮を題する也砌と云階の下に花開ハ其香か風ふくなり

白

階上の御簾の中

煙開翠扇清風曉水泛紅衣白露秋

曉まゝ紀水煙のゝ中に翠の扇をひらき清き風を生ずるとも

荷のそよゝをあをさ扇まんるなり紅蓮花の咲ちらるゝ水ゝうつり紅き衣

許渾

を泛べるとゝ白る露白ハ秋の景物蓮八夏の末ゆゑ秋ゝ入る

花ゆゑ夏の季ともいふ清風の字も時の景物なり

緣何更覓吳山曲倭是吾君座下花

是吾君座下の花
るまばなり

岸竹枝低るハ應に
鳥の宿する。應。
潭荷葉動ハ是魚
の遊ぶん

經ハ題目爲佛小
ハ眼爲知ぬ彼ぶ花

亭子院の寛平法皇五十の御賀行ぎるる御屏
延喜の帝行幸あり御屏風ハ吳山ヶ葉の蓮華を画ーて
ての御製ハ佛氏の說ハ天竺の流水大臣罪を犯ーて
小池わりて青蓮花わり是を尋來ハ罪を免さんとの王命をふむりて
かこに至る青蓮花赤楠檀わるとも大龍まゐり近付くべし聞て吳山
羅漢を請ド問りれハ南無佛と唱へる龍神も佛子と思ひ害せ
じて花を採得て王に献ー免されり法華傳ふるさう此意を作らそ
ゆへて何ぞ更に吳山の曲をさぐり覓べき此画ーてさぐちふ其蓮ゆん吾
法皇の御座の下の花
るるを遠くもとめんや

延喜御製

紀在昌

岸竹枝低應鳥宿潭荷葉動是魚遊

池辺の亭にて晩の景色を作る岸の竹の枝低るハ鳥ぶ塒をトめる
ともも潭水に浮ぶる荷の葉の動くハ魚の遊ぶてわるん

源爲憲

經爲題目佛爲眼。知汝花中植善根。

妙法蓮華經ハ蓮花題目と云題目ハ名とする又諸經ふ佛の
眼を青蓮ハ喩てわり汝諸の花のうちふも善根を植るとの知る佛眼の
中に善根を植と
ハ

郭公

一聲の山鳥ハ曙雲
の外萬點の水螢ハ
秋草の中

釈迦末の佛事の詩にくしと又法華経一部八巻ハ
後秦の鳩摩羅什三藏の飜譯をるれなり

古今
たちもとまるのふごろもまぬくめて行の人ハ袖ぬ〜わさむく

心ハ持てく欺ハ詐なり濁ふ染ぬ清淨の心を持すくるく露を
王と云せるぞ　又ハ持てくつの字ハ略すと柳の歌ふ釈す

郭公

郭国の公の魂鳥となし故の名又ハ蜀の望帝の魂ハ
と蜀魄とも云漢ふ子規其外称呼多知名保止々
捉てくるに皆似て異と然とも同種の物るぞ郭公を別べく

一聲山鳥曙雲外萬點水螢秋草中

曙の雲の外に山鳥ハ一聲啼萬點の螢秋のくさむら
飛ふ草螢ハ化すハ水辺のとなるぞ水螢と云多ハ少と句成成ぶ面白

許渾

明日香

さつたやをちかたの時るなくるなるのいてぬるをちた

新後拾遺よハ赤人とかりおぶつうかたとハ五月闇のくさ空を
さーてくるなりるハ遥なりとよ

拾遺　仍ゆゑでゐ侍つ郭公今一こゑのゆまかりされ　公忠

一聲のわゝざす今一聲聞されまゝ行もやらずゝ日を暮さるゝ

此哥北の宮裳着の屏風の繪をかゝるゝ女の裳着ハ男の元服ふ同ー

拾遺　さよふかゝて孫さめざうせだ時鳥くつてふーをぞぐりれ　忠岑

寢覺ふまつ声をさゝうゝ聞て角ゝかく孫ざめれ

ゝその人づてにのゝさゝべきゝゝの城となり

螢

月令に季夏の月爾草化して螢となる

螢火亂飛秋已近辰星早沒夜初長　元稹

螢火ゝぐれ飛で秋ゐんとす宵ふ見ゝる水星ゝちまち西に沈ゝ

沒して夜長の比にゝるゝ辰星ハ北辰ふわゝれ水星ゝ五星の一ゝそ常ニ

日輪ふ前後して轉ずる也日にかゝれ西にゝ日に前て晨に東にゝ日に合

そもハ伏ゝてゝ見ず春分の比奎角のあゝふゝく夏至に井宿秋分ふ角亢ふ

つゝ見ゝ至ふ牽牛ふつゝてゝ見ゝ

太白星ふ比すもハ甚低ゝふ

蒹葭水暗螢知夜楊柳風高雁送秋　許渾

水邊の蒹葭のゝゝ幽暗るもハ螢の光ゝ夜をわゝ夜を

知ゝると云雁ゝ南に來ゝハ胡塞の楊柳の風ふ秋の氣を送ゝ胡地柳色

明明仍在誰追月光於屋上皓皓不消豈積雪片於床頭　紀門言

螢の光ゝ書ゝ讀ゝ題せる賦ゝ晉の車胤字ハ武宗河東の人

ゝう家貧ゝ油ゝれハ螢をゝるゝの囊ふゝり其光ゝ夜學をゝ

吏部尚書日本式部丞と云官ゝのゝる又江士清月夜に屋の上ふ書をゝ

月の傾ふまゝうゝ光ゝ追て終夜文をゝみゝ又孫康家ゝ貧ゝれハ雪ゝ

積て夜文をゝみゝう螢の光ゝ明ゝとゝいつまゝても仍在ゝハ月の光を追ふ

及ゝず皓々ふ消すもハ雪を一片づゝ持來て床の頭ふ積ふゝ及ぬゝ

明明とゝて仍在誰ゝう月光を屋上ふ於追ん皓皓とゝて消

不豈雪片を床頭ふ於積んや

山經の卷の裏ふ

岫ゝ過ゝゝ疑海賦の篇の中ふハ流了

宿するに似ゝう

山經卷裏疑過岫海賦篇中似宿流　橘直幹

夏の禹王九洲の水ゝ治ゝ鳥獸異魚の奇怪なる事ハ人ゝ以後深山幽谷ゝ通ふ人ゝて驚んゝを思て海山の事ゝ記ゝ山海經

云書に作る其山の部を山経と云螢火まて是成るあハ螢ゞ山の嶋成飛過るゝと疑ふる嶋ハ山よ穴ある処又木玄虚海賦を作るゝ文選に出

れを螢まてゝ成るあハ流水に螢が宿るゝ心もゝ

つま焼くさあるゝ春のゝ夕べの風ゝさえぬ蛍ゝ　赤人

新勅撰ふゝみ人をゝず風にさえぬハとゝ叢のゝゝる火を荒屋のゝゝ火とゝえんゝるが風ゝ消ぬふゝをさて八螢ゝてあるゝと知る

後撰集

つめども、かくゝぬとの八蛍虫ゝ身ゝあるゝ思ひゝゝ

宇多天皇の皇女柔子内親王を桂の皇女とゝ奉るゝ螢をゝゝてゝとあるゝ童女ゝ神の袖にそゝつゝてゝゝゝる又大和物語ゝ八桂の皇女の御許へ敦慶親王からひゝをゝ宮の童女こひてよみ奉るゝとあり恋ゝ八恋哥ゝ

蟬

土中の虫夏に至て化して蟬ゝるゝ露を飲て鳴

遅遅ゝ春日。玉甃暖ゝ温泉溢。嫋嫋

蟬

遅遅ゝる春の日。玉甃暖かして

温泉溢。嫋嫋ゝる秋の風。山蟬鳴て宮樹紅ゝ

秋風山蟬鳴宮樹紅　白

驪山宮の賦ゝ秦の始皇宮を建ゝ出ゝの天子行幸して暑を避ゝふ唐の憲宗帝八六宮百官従ひ行て路すゝゝ鼎多を思ゝ行幸

ゝゝゝを美て作る白氏文集楽府の中ゝ出ゝる驪山高の詞ゝ

遅々ゝ春の日永ゝ王の躬八宮を愛ゝて始皇此山ゝて神女と遊ひ

いゝゝ肩ゝるゝゝあるを怨て帝女垂ゝゝゝゝる身に帝ゝ帝ゝ射

ゝゝれバ神女心ゝけて温泉を出ゝゝゝ愈ゝる怨ゝ事ゝて温泉溢ゝ

云嫋々ゝる風の景色秋を告ゝ山蟬鳴て宮殿ゝゝゝ樹ゝの梢ゝ紅つゝゝ物あゝゝ

千峯鳥路合梅雨。五月蟬聲送麥秋

千方つゝゝる峯ゝ雲ゝゝゝ梅雨ゝ降ゝ鳥路八雲路と云ゝ梅熟ゝ比の雨ゝ梅雨と云又梅八黴ゝ五月雨の湿黴を生ゝゝゝ云又月ゝ四月を麥秋ゝ八百穀真生ゝを春と熟ゝゝゝ秋と云麥八四月熟ゝ五月刈ゝ四月ゝ秋ゝ送ゝと行

本ゝ房祐

の聲八過行麥の秋ゝ送ゝと行人を送ゝゝ云ゝゝ

千峯の鳥路梅雨を含。五月の蟬聲麥秋を送

烏絲蕪ニ下テ秦苑靜ニ蟬鳴テ黃葉漢宮秋ニ鳴テ漢宮秋ニ

今年例ニ異ニシテ腸先斷ニ是蟬ノ悲ノ客ノ意悲ニ

歲去歲來テ聽ドモ變セ不ニ。言ヒ莫ニ秋後遂ニ空ト爲ル

烏下ニ絲蕪ニ秦苑靜ニ蟬鳴テ黃葉漢宮秋ニ

三體詩ニも出て咸陽宮の荒くさまを作る始皇の時の人許渾

苑も今ハ荒て草ハ心なくして綠くまさり人もなく靜かなれバ

烏ハ下てあそぶ蕪ハ惡ミ人秋の梢黃ばみ色つく蟬の声も悲く

漢宮の盛なりしも秋の寂しくて衰ヘのさまを述べ

今年異ニ例ニ腸先斷ニ不是蟬ニ悲客意悲

菅公讃岐守ニ任国ニその御作今年ハ例年ニ違ヒ蟬の声ハ

悲く腸ハ斷るやうなれ蟬の声ハ客ニ成て意悲ミ斷

歲去歲來テ聽不ニ變ニ莫ニ言ヒ秋後遂ニ爲ル空

歲ハ去ル歲ニ同じとも蟬の色ハ年々同じ秋の後脫の空蟬紀納言

ふるとハいふ事なれ空ハむなしくきこえ

墓山の草ハ榕の葉ハ黃ばむ蟬の聲ハ人ハ

てこそハあきこそ

なるべし

扇

盛夏ニも消不ニ雪。終年ニも盡ク無ニ風。秋ヲ引テ手裏ニ生ス。月ヲ藏テ懷中ニ入ル

後撰

これ[illegible]ハ人もとぶめぬ袁すてねとなく出のこまこそ

後撰集ニ[illegible]ハ人を[illegible]ぬ[illegible]と云ハ誰ハ[illegible]心の作に[illegible]

[illegible]ハ蟬の空[illegible]

声すると云を戀ふ[illegible]

扇

女媧氏扇を造日本ニて平敷盛ハ始とす云ハ

後世の事にて其前すでに扇あり

盛夏不ニ消雪。終年無盡風。引テ秋生ス手裏ニ藏月入ル懷中ニ

白

扇を用ひ盛に暑ク夏も雪あるごとく常の風ハ止ミあるごとく年の

ながらへ終まで[illegible]やまぬ風を手に取上ハ秋の冷ーさ手の裏にあり

[illegible]ハ明月の色[illegible]

新裁齊紈素皎潔如霜雪裁爲合歡扇團團似明月

を雪月ニ[illegible]

下ニ雪の詩の釈[illegible]

○班婕妤扇を製る詩

班女の[illegible]上ハ納涼の詩

月ずヤ其セ不夜漏初テ分テ後唯翫秋風未到未前

不期夜漏初分後唯翫秋風未到前

輕扇明月ハ動ずと云題ぞ白扇のうごくを月のごとく

期せずハ待合さぬと云心夜漏とハ銅の器に水を盛下に孔をあけ水を漏

一所の壺ぶらけ右を書て左を夜とし漏刻是を初て分ハ左の壺

夜よるの初月ハ夜を期して出ずども是ハ扇の月も昼出て夜期合

さぬ月ハ秋を賞するども是ハ秋風

さぬ夏のわぎにめでわくべ

拾遺

天の河川淑ぶて七夕にわぶれ風ばわやこのこゝ　中務

羅の扇に織つけ

る哥なり

拾遺

天の川扇の風ぞ雲をもそ立すみてこゝる鶯のこゑ　元輔

こゝ云云詞橋の縁あり　鵲のそ〳〵七夕二星の約とも

秋の卷七夕の所にくゝ〳〵釈すべこれ暑す

家集

思ゞてはまうする秋の風まぬぐ〳〵ぬるまもしとゞもよ　中務

北の宮の内に献りの御扇ふと詞書あり王の御手にふるあか扇

ふぐ此風ハ天下の万民ゆ水ぬぐもこれなどぐ〳〵と祝

和漢朗詠集抄卷之二終